

# 三省堂 高校英語教育

2010年 夏号

巻頭エッセイ

若者たちの太陽 平野暁臣 …… 1

特集

## 新学習指導要領： 新しい授業を目指して

- 新学習指導要領のポイントと授業 金子朝子 …… 2
- 中学の授業の変化を高校の授業に生かすために 山本崇雄 …… 6
- アウトプット活動を伴うリーディング指導 平尾一成 …… 10
- 英語による授業「教える」から「学ばせる」へ 木村純一郎 …… 14
- 「自学自習できるような指導」を考える 谷口雅英 …… 18
- 英語を実際に使う授業の実践 木村 越 …… 22

英文エッセイ Bernard Susser …… 26

2010年度センター試験の分析と対応 渡辺 聡 …… 28

アトランタ便り 横川博一 …… 表紙裏

表紙写真について 田嶋美砂子 …… 表紙裏

*'We Don't Climb'*

*Please Don't Climb Uluru*

*Our traditional Law teaches us the proper way  
to respect our Law by not climbing Uluru.*

*What visitors call 'the climb' is the traditional  
Mala men upon their arrival at Uluru in the  
great spiritual significance.*



## アトランタで体感した異文化

神戸大学 横川博一



青い空、そして日本よりいくぶん快適な空気を肌に感じながら、私はアメリカ、ジョージア州・アトランタに降り立った。今年の3月はじめのことであった。

「私、今度、学会でアトランタに行くんですよ。」

「じゃあ、南部に行かれるんですね。初めてですか?」

私はこの同僚の何気ない一言にはっとした。そう、南部は初めてだ。「よく知っている」はずのアメリカだが、そんな地理的感覚にさえ鈍感な自分を恥ずかしく感じた。

しかし、そのおかげで、アトランタがいったいどんなところなのか、この肌で体感してこようという興味と好奇心は一気に高まった。

私は、「I have a dream」の演説で有名なキング牧師の歴史資料が展示されているKing Centerを訪れた。教科書などでは描かれることの少ない公民権運動時代の彼の活動が、年代を追ってパネルで詳細に紹介される。いかに困難を伴ったものであったのか、足早に通り過ぎることのできない史実に、しばし呆然と立ち尽くす。そのとき彼を支えたものは、暴力では何も解決できない、という信念であった。

世界最大のコーラ博物館、World of Coca Colaにも足を伸ばした。ここでは、世界のコーラのうち、約70種類が試飲できる。

「あっ、これおいしい!」

「うわっ、これまずい!」

私も思わず、みなと一緒に、はしゃいでしまった。しかし、考えてみれば、味覚ほど個人差の甚だしいものはない。国や文化によって、これほどまでに違った味の



コーラが飲まれているという事実に、文化の多様性とその理解がいかに乏しいかを私は感じる事となった。

私は、滞在中に誕生日を迎えた。これを皆が祝ってくれたのだが、レストランを出ると、それを察知したstreet musician風の男性がHappy Birthday!をギターで演奏してくれる。信号を待っていると街角のpolicemanが「誰の誕生日?」と尋ねてきて、Happy Birthday!と、そのあたりの人も巻き込んで祝ってくれる。私のAfrican-Americansに対するイメージは、がらりと変わった。いや、本当の姿に自分のイメージがようやく追いついたのかも知れない。

とにかく、アトランタの人はみな陽気だ。そして、みな親切だった。これを、Southern Hospitalityと言うのだと知ったのは、帰国後のことだ。しかし、まさにそれを体感した一週間であった。

表紙写真  
について

## We Don't Climb

星美学園中学高等学校 田嶋 美砂子

シドニーで搭乗した飛行機がウルルに向け、出発した。3時間強の飛行を経て、そろそろ到着かという頃、機内のモニターにはウルルカタジュタ国立公園を紹介するビデオが映し出された。目に入ってきたのは「We Don't Climb」の文字。しばらく見ていると、それは国立公園内やその周辺に居住する先住民アナングがウルル登山を計画する観光客に向け、「登らないでほしい」と訴えるメッセージであることがわかった。

ウルルを聖地と考えるアナングは環境・水・遺産・文化省のサイト\*内で、観光客のウルル登山について次のように述べている。“The climb is not prohibited, but we prefer that, as a guest on Anangu land, you will choose to respect our law and culture by not climbing.”(「登山は法律で禁止されているわけではありません。しかし、アナングの土地の訪問者であるあなた方には、登らないことによって私たちの慣わしや文化を尊重してほしいと願っています。)」

このような呼びかけに対し、「登ってほしくないのであれば、なぜ法律で禁止しないのか」と問う人々がいる。この問いには「渋々ながらも登山を許容することで観光客を惹き付け、結果として利益を得ているのだから、文句は言

えないのではないか」という含みがある。確かに、国立公園の所有権を持ち、政府と賃貸契約を結ぶアナングは年間リース料に加え、観光客が支払う国立公園入園料の25%を手に入れている。オーストラリアの低賃金所得者層を構成する彼(彼女)らにとってこれが大きな収入源となっている事実は否定できない。とはいえ、彼(彼女)らが現状に甘んじ、呼びかけ以外の行動を起こしていないと考えるのはやや性急な判断である。

実のところ、アナングは昨年7月、登山禁止を盛り込んだ新しい国立公園運営計画案を発表している。しかし、それを最終的に否決したのは政府であった。観光業界に配慮してのことである。過去の非人道的な先住民政策に対し、初めて公式に謝罪したラッド首相でさえ、登山禁止に話が及ぶと反対の意を表す。この問題にはオーストラリアの歴史的、社会的、政治的、経済的な諸事情が複雑に絡み合っている。

さて、シドニーでまとめた私の荷物には滑り止め付きの軍手が入っていた。観光客の登山を快く思わない先住民がいると耳にした記憶はあったものの、寡聞にしてそれ以上の情報は持っておらず、登るつもりでいたのである。ウルルの麓に置かれた看板に「We Don't Climb」の文字を再び見つけたとき、私は登山ではなく、周辺散策を選んだ。

\*Department of the Environment, Water, Heritage and the Arts  
(<http://www.environment.gov.au/parks/uluru/visitor-activities/do-not-climb.html>)

# 若者たちの太陽

眼下に渋谷の街を睥睨しながら、岡本太郎の最高傑作は日々30万人と対峙している。長らくメキシコで行方不明になっていた幻の大壁画『明日の神話』である。

2003年にメキシコシティ郊外で発見されたときには崩壊寸前だった。その後日本に移送され、1年に及ぶ修復作業を経て2006年夏に初公開、2008年秋に渋谷駅に嫁入りした。波乱に満ちた道のりであった。

描かれているのは原爆が炸裂する悲劇の瞬間だ。中央には核に焼かれて燃え上がる骸骨。巨大画面を圧して広がる鮮烈な炎。強烈な原色が見る者を圧倒する。

だがこれは惨めな被害者の絵ではない。残酷で凶悪な力と同じだけのエネルギーをもって人間の誇りもまた炸裂する。その瞬間に「明日の神話」が生まれる。そう信じた岡本太郎の美意識が凝縮されている。だから作品全体が気高く、美しい。

しかも幅30m、高さ5.5mというサイズは一般的な「絵画鑑賞」とは質が違う。まさに“浴びる”感覚だ。

驚くべきはスケールやモチーフだけではない。国を跨いだ巨大壁画の再生という一大プロジェクトのすべてが作家の死後の出来事なのだ。それを「人生最後の仕事」と語っていた太郎のパートナー・岡本敏子の決意と覚悟が人々を渦に巻き込み、いつしか大きなうねりとなってこの難事業は実を結んだ。浄財を寄付した者も万の単位に及ぶ。

無数の人々が壁画の再生を願い、その一端を担いたいと考えた。この壁画を必要としたのは作家本人ではなく、いまを生きるぼくたちなのである。

中心にいるのは若者たちだ。「エネルギーをもらいました」「これで一歩前に踏み出せそうな気がします」「壁にぶつかったらまた来ます」……。岡本太郎記念館のスケッチブックには彼らが残した言葉が並ぶ。

空間メディアプロデューサー・  
岡本太郎記念館館長

平野 暁臣



先が見えず閉塞感に包まれた時代。自らを覆う分厚い雲を太郎が切り裂いてくれる。一筋の光がさしてくる。希望と勇気が湧いてくる。きっとそう感じているのだろう。岡本太郎は彼らにとっての太陽なのだ。

かつて太郎はこう言っていた。

「芸術は太陽と同じだ。太陽は熱も光も、無限に与える。ひなたぼっこしても、“おい、あったかかったろう。じゃ、いくら寄せせ”なんて、手を差し出したりしないだろ?」

『明日の神話』の前で“熱”を浴びる若者たちを見て欲しい。みな嬉しそうで、少しばかり誇らしげだ。

彼らは太郎のメッセージを皮膚感覚で受け取っている。岡本芸術を貫く基本哲学。それは自由、尊厳、誇りだ。“若者たちの太陽”が放射しているのは、時代に傷つけられたこれらの感覚なのである。



平野 暁臣 (ひらの・あきおみ)

空間メディアプロデューサー・岡本太郎記念館館長。ゼネラルプロデューサーとして『「明日の神話」再生プロジェクト』を統括。著書に『岡本太郎—太陽の塔と最後の闘い—』他

—高校の授業はこう変わる—

# 新学習指導要領のポイントと授業



昭和女子大学

金子朝子

## 1. はじめに

新学習指導要領では、学力の重要な要素を、①基礎的・基本的な知識・技術、②知識・技能を活用し課題解決のために必要な、思考力・判断力・表現力、③学習意欲、の3項と規定している。外国語は2011年から小学校5、6年生の英語活動が必修化され、2012年には中学校で新指導要領の完全実施、2013年には高等学校で学年進行にそった実施が決定されている。ここでは高等学校外国語の改訂ポイントを確認し、なぜそのような改訂が行われるのかについて、外国語の学習と習得という視点から検討してみたい。

## 2. 外国語英語の特徴

新課程の教育内容の特徴は、言語活動、理数教育、外国語教育の充実をはじめとして、はじめて規定を削除し、伝統や文化に関する教育、道徳教育、体験活動の充実、職業に関する教科・科目の改善などが重点となっている点である。多くの教科で活用の重視が掲げられ、主体的な学習態度、学習習慣の定着などが強調されている。外国語においても、コミュニケーション力育成を目指し、英語を使用することを重視した教室活動の充実が特徴となっている。

以下に、新学習指導要領 外国語の改訂内容の特徴を、まずはその目標について小・中・高の連携の視点から捉え、次に、高等学校の外国語科目の編成に注目して概観したい。

### (1) 小・中・高の連携

今回の改訂の最も大きな変更点は、小・中・高の流れが出来上がったことにある。それぞれの学習指導要領の英語の目標を比較してみると、その点が明確となる。

#### 小学校英語活動の目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

#### 中学校外国語英語の目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

#### 高等学校外国語英語の目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

下線は、他と違う部分に施してある。外国語を学ぶことによって、①言語や文化について（小学校では体験的に）理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、③小学校では外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を、中学校では聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの、高等学校では情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養うことが、初等・中等教育における、英語教育の目標と規定されている。つま

り、小学校では音声や基本的な表現に慣れ親しませながら（方法）、中学校では聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの（種類）、高校では情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする（レベル）のコミュニケーション能力を小・中・高が連携して育成することが目標であり、そのために、言語や文化について（小学校では体験的に）理解を深め、積極的にコミュニケーションをはかろうとする態度の育成を図ることが必要と記されている。

## （2）高等学校外国語科目の編成

まず、現行の「英語Ⅰ」3単位、「OCⅠ」2単位、のどちらか1科目の選択必修から、「コミュニケーション英語Ⅰ」3単位（2単位まで減可）が必修科目と指定されたことは注目すべきであろう。これは国語、数学、外国語に共通した改善点でもあるが、はじめて規定が削除されたことに対応して、誰でもが必ず学ばなければならない基準、それも最低基準を示したことになる。

また、科目構成に関しては、4技能の統合的かつ総合的な育成を図る「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、理論的に表現する能力の向上を測る「英語表現Ⅰ、Ⅱ」、会話能力の向上を測る「英語会話」に加えて、中学校から高校への橋渡しの科目として「コミュニケーション英語基礎」を合わせた計7科目に再編され、これまでに比べてプロダクションする能力の向上により力を入れている。そのため、指導する語彙数も充実し、コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを履修すると、これまで中高で合計2,200語であった語彙数が、3,000語までに達することとなる。

このように、小学校・中学校だけでなく、高等学校の外国語も、生徒が英語に触れ、実際に使用する機会を充実することを目指したものとなっている。授業を実際のコミュニケーションの場とするために、授業は英語で行うことを基本とすることも明記され、つまるところ、聞く、話す、読む、書く、の4技能を有機的に結びつけ、さらに、日常会話的なレベルを超えて英語によるコミュニケーション力にまで高めていくことを、最終的な狙いとしているのである。

## 3. 4技能を統合・総合したコミュニケーション力の育成

コミュニケーション（communication）の語源はラテン語のコムニス（communis）で、共通したものの、共有物（common コモン）を意味している。日本語には、これに近い意味を持つ語彙として、伝達、報道、情報、通信などがあるが、どれも「何かが伝えられること」のみを表し、英語の「コミュニケーション」が持つ「伝えられることを通して、何かが共有される」という意味までを含んでいない。そこで、日本語でも「コミュニケーション」とカタカナで表記するようになったようだ。

さて、今回の改訂によって、生徒にどのような英語力が求められているのだろうか。外国語の学習と習得の視点から、文法指導、スキルの統合、繰り返しと定着の3点に絞って考えてみたい。

### （1）文法指導

一般的にコミュニケーション能力は、「文法能力」と、社会的に適切な言語使用のための「社会言語能力」、一貫した筋の通った話しをするための「談話能力」、上手くコミュニケーションが図れない場合の手段としての「方略的能力」が含まれると考えられている。文法能力はその基本になる能力であり、文法の知識はコミュニケーションのために不可欠である。しかし、指導要領に示されている「コミュニケーションのために必要な文法知識」はどのようなものなのだろうか。

実は、私たちは2種類の文法知識を持っている。一つは、宣言的知識（declarative knowledge）と呼ばれるもので、どのようなルールが存在するかを説明できる知識である。例えば、「英文学の〇〇大の学生」と「〇〇大の英文学の学生」は語句の順序が異なってはいるが、両方とも正しい文と判断できる。ところが「学生が3人本を読んだ」と「学生が本を3人読んだ」では、後の文は誤りである。日本語文法の宣言的知識があれば、始めの例文では、「英文学の」も「〇〇大の」も「学生」を修飾しているので、その2つの語句の位置が変わっても意味に変化がないが、後の例文では、「学生が3人」が「学生3人が」と同じ働きをして、一塊で主語となっており、その塊を分解して一部を移動してしまった文は誤りであることが説明

できる。しかし、特に日本語の文法に詳しい人以外は、「そうは言わない」程度の説明しかできない。これは適切に使える知識である手続き的知識 (procedural knowledge) は持っているが、宣言的知識は持ち合わせていないためである。これまでの英語での文法指導は、宣言的知識をつけることに焦点を置いてきた。また、テストでも宣言的知識のチェックが主で、それがあれば、手続き的知識もあるものと想定していた。自転車に乗ることを思い浮かべてみよう。サドルにどう座って、足でどうペダルを漕げば自転車が前に進む仕組みになっているのかを説明できる人は、ほとんどいないのに、自転車を上手く漕げる人は多い。手続き的知識の習得の為に、宣言的知識は必ずしも必要とはいえない。新学習指導要領では、英語を学習する目的は、手続き的知識を持つことであることを、より鮮明に打ち出している。勿論、宣言的知識は、手続き的知識の習得を早めたり、高いレベルに至る習得を可能にしたりすることはできるだろう。しかし、初歩的な手続き的知識の習得には宣言的知識が邪魔になることすらある。自転車の例で説明されるように、英語でコミュニケーションを図るためには、ルールを説明できる宣言的知識はあくまでも補助的なもので、英語を適切に使える手続き的な文法知識を身につける必要があることになる。

## (2) スキルの総合・統合

スキルの総合・統合は、現行の指導要領にも謳われている。なぜ、総合・統合が必要なのだろう。そしてそれによって生徒にどのような力を育成すべきなのだろう。

現行の「英語 I, II」では、読むこと・書くことを中心とした4技能を総合的、統合的に育成し、「オーラル・コミュニケーション I, II」で聞くこと・話すことに重点を置いた指導を行うことになっている。しかし、現実はどうしても文法や4技能をバラバラに指導することが多かった。新指導要領では、「英語 I, II」に「リーディング」の内容も加えて「コミュニケーション英語 (基礎) I, II, III」に集約し、発信型の話すこと、書くことを、さらに「英語表現 I, II」と「英語会話」で強化する仕組みになっている。このような大きな編成

替えによって、特に必修科目と指定された「コミュニケーション英語 I」では、これまでのような、文法と4技能それぞれを別個に孤立したスキルとして指導するだけで終わらず、それらの指導を有機的に結びつけた活動への移行が示されている。

私たちの生活の中でのコミュニケーションを考えてみると、4つのスキルを別々に使う機会はそう多くはない。コミュニケーションの定義は「伝えられることを通して、何かを共有すること」であることを思い出すと、一方通行の伝達で終わるのではなく、伝達の結果が重要である。何となく見ているテレビ番組のコミュニケーション率はそう高くはない。テレビを見ながら、見ている人同士が意見を交わしたり、必要な内容を後でメモに取ったりすれば、はるかに有効なコミュニケーションが成り立つであろう。しかも、日本語であれば、何となく見ているテレビからもある程度の情報伝達が可能かもしれないが、外国語の場合は、そうはいかない。情報や気持ちを正確にまた適切に伝達し合うためには、さまざまなスキルを駆使した情報伝達が必要となろう。教室を出て実社会で行われるコミュニケーションに準えて、4技能を総合的・統合的に使うコミュニケーションを教室内に持ち込むことが、教室外でも通用するコミュニケーション力を育成できるという考え方に基づいた方針である。

しかし困ったことに、このようなスキルの総合・統合は、一律にどのような授業環境でも同様に行えるものではない。生徒と教師の年齢や英語に対する心情、生徒の学習動機、カリキュラムやテキストの内容など様々な要因が影響し合う状況で、それらを上手く調整できるのは、教師しかいない。テキストや補助教材にも工夫を凝らしたものがたくさん作られているが、これらは料理で言えば、紙に書かれたレシピと同じで、自分の手持ちの材料がそこに記載されたものと違っていることもしばしば起こる。出来上がった料理を食べる人の「舌」も様々に違う。こういった制約を熟知して、「愛情」をこめた料理人の腕と工夫があってこそ、すばらしい料理の一皿が出来上がる。英語の教師の場合も同様だ。WEB教材なども今後発達していくに違いないが、それらがどうしてもカバーできないのが、生徒一人一人の学習状況に

合わせて行われる、現場の指導であろう。教室外でも通用するコミュニケーション力の育成を目指すためには、現場の教師の指導への期待が大きい。

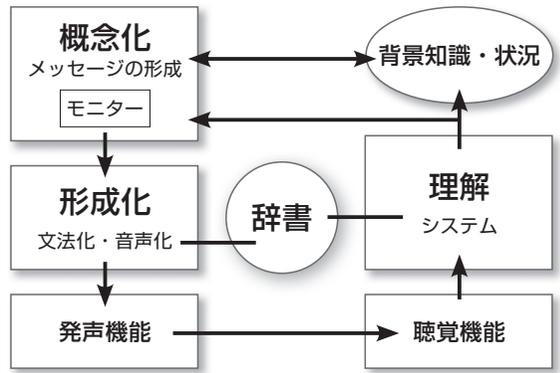
### (3) 繰り返しと定着

「コミュニケーション英語基礎」が設定された目的は、中学校の英語から高等学校の英語へのキャップを埋めることにある。それは、中学校での学習が定着していないと、高校での学習が砂上の楼閣になってしまうからだ。学習した内容を定着することが必要なのは、なにも中学から高校へのつなぎに限ったことではない。むしろ、1学期分、1年分、3年分と溜め込まずに、常に普段の授業で、繰り返して学習した事項を使用する活動を工夫したい。繰り返す事項が溜まれば溜まるほど、現実には、十分に繰り返しの時間を取ることができず、定着がおぼつかなくなってしまう。基礎を固めることの重要性は既知のことであるが、では、そのために繰り返して英語を使う活動や練習が、なぜ英語学習に有効なのだろう。

次の図は、Levelt (1989) を参考にまとめた言語情報処理モデルである。これによれば、言語情報は、まずこんなことを伝えたいという何らかのアイデアが湧いて「概念化」され、次に、自分が持っている語彙や文法の知識を頼りにそれを言語表現として形作る「形成化」の段階に流れていく。そして、その情報が「発声機能」に流れ発声されると発話となる仕組みだ。このモデルは話し言葉を前提としている。もちろん、書き言葉の場合も発声こそはされないが、プロセスは同じと考えられる。発声された言葉は、聞き手だけでなく、発話者も同様に聞いて理解し、必要な情報は辞書や背景知識の認知システムへも流される。この情報システム全体が自動化されることが、定着である。日本語を使用していれば、一瞬のうちにこれらすべての段階に情報が流れて、また次の概念化へ進む。外国語である英語を自動化するためには、とにかく次の段階にスムーズに情報を流す必要があり、その流れを強く、速くする方策は、同じ種類の情報を何回も繰り返して流すこと以外にない。

このモデルに照らし合わせて考えると、昔からよく行われているレペティション (repetition)

## 言語情報処理モデル



の活動がなぜコミュニケーション力育成に直接的な効果を上げていないかが推測できる。レペティションでは、「概念化」を通らず、最悪の場合は「形成化」や「理解システム」も通らずに、単に「発声機能」と「聴覚機能」を行き来するだけで終始してしまう可能性がある。だから、生徒が、考えもせず単に教師の口真似だけをする現象が起こる。また、暗記の活動についても、暗記したことは「辞書」に蓄積されても、生徒がそれを使うような「概念化」が起こり、「辞書」から英語を引き出す数々の体験をしなければ、定着することは不可能であろう。つまり、定着のための繰り返しは、このモデルに示されたすべての段階を情報が流れるような活動の繰り返しによってはじめて実現可能となる。最近では、このような人間の情報処理を配慮したタスクに基づいた (task-based) 指導も導入されており、その成果が期待されている。

## 4. おわりに

英語のコミュニケーション能力を養うことが、高等学校外国語英語の目標である。生徒が自発的に英語を使う教室環境を整えるための教師の役割は大きい。教師ではなく生徒が、考える、気付く、意識を持つ、繰り返す環境を作ることこそが、学習事項の定着に結びつく。教室の中にあっても、英語でコミュニケーションをはかる喜びを知ること、それが外国語英語の目標を達成するための起爆剤になることを期待している。

### 【参考文献】

Levelt, W. (1989) Speaking: From Intention to Articulation. Cambridge University Press.

**— 中学の授業はこう変わる —**

# 中学の授業の変化を高校の授業に生かすために



都立両国高等学校附属中学校

山本 崇雄

## 1. はじめに

今回の指導要領の改訂で、中学の英語授業はどのように変わっていくのであろうか。高校の先生方にとっては高校1年生の指導方針にもかかわることで、関心も高いのではないだろうか。中学校で伸ばした力を高校でさらに伸ばし、不十分な点を高校で補っていくといった理解ができると中高の接続はスムーズになる。現在の中学校の英語授業の実態をふまえつつ、新指導要領をきっかけに中学の英語授業がどう変化し、どのような力を持った生徒が高校に入学してくるのかを、期待を込めて述べていきたい。

## 2. 中学校の授業では…

中学校の授業と聞くと、どのような授業を想像されるであろうか。高校の先生と話をすると『「聞くこと」「話すこと」が中心で、「文法」や「書くこと」がおろそかになっている』といったイメージが大きいように感じる。実際に中学校ではどのような授業が行われているのかは、中学校の経験が長い私にとっても、実は分からないことが多い。それくらい、中学校の英語の授業は一教員の裁量によって大きく異なっているのが現状だ。よって生徒の英語の力も多様化し、そのことが高校1年の指導を難しくしている。

中学校の英語授業を一般化することは難しいが、中学校の英語教育の実態をつかむために行わ

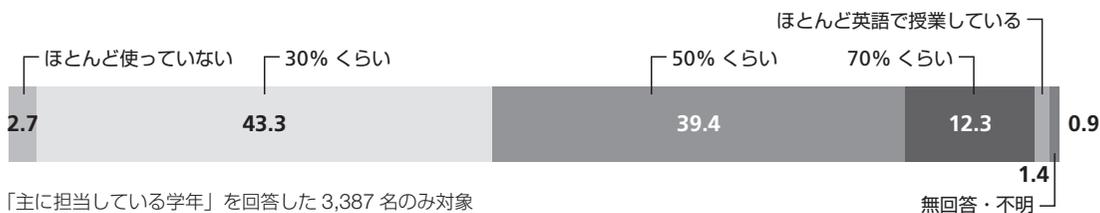
れた「第1回中学校英語に関する基本調査」は大変参考になる。この中に興味深いデータがあった。

一つは中学校英語授業での英語使用割合である。(下図参照) この結果から、ほとんど英語で授業をしている先生の割合がわずか1.4%と非常に少なく、授業の半分以上を日本語で行っている先生が多いことが伺える。さらに、教員の年齢が上がるにつれ、英語が使われる割合は減っていく傾向にある。次に指導方法の実態についてのデータも興味深い。授業内容でよく行うものとしては「音読指導」(87.8%)に続き「文法指導」(71.1%)があげられ、「ゲーム」(24.3%)や「スピーチ・プレゼンテーション」(5.1%)は下位である。ここから、日本語が意外に多く使われ、文法指導も多く、スピーチやプレゼンテーションの時間が少ないという実態が見えてくる。この実態をしっかり高校の先生に伝えると共に、新指導要領で中学校の授業が変化する点も高校から見えやすくする必要がある。

## 3. 新指導要領が中学の英語授業を変える

新指導要領で述べられている「コミュニケーション能力の基礎」を育てるには、どの学校でも「聞く力」「話す力」をしっかり育て、それを土台に「読む力」「書く力」そして「文法を理解する力」につなげていく指導が求められている。

英語使用割合 (%)



しかしながら、前記の調査の結果からも、中学校の指導方法は多様化しており、すべての学校で「コミュニケーション能力の基礎」を育てきれていると言えないのが現状だ。中学校では、高校にスムーズにつなげるためにも「コミュニケーション能力の基礎」をしっかりと育てなければならない。このゴールに向かっていくため、新指導要領では様々な工夫が行われている。その中で、次の3点に注目し、中学の授業がどう変化していくかを述べていきたい。

**ポイント① 週3時間から4時間へ**

授業時数の増加（各学年とも年間105時間から140時間に増加）

**ポイント② 4技能のバランスをとった活動**

「聞くこと」、「話すこと」に加え、「読むこと」、「書くこと」の重要性を明示。

**ポイント③ 「発信力」の育成**

全教科にわたって強調されている「思考力・判断力・表現力」を育成することを目指し、英語で「発信する力」を育てる。

**4. 新指導要領ポイント①**

**～授業時数が増え、授業はこうなる**

本校はカリキュラムの中で「英語によるコミュニケーション能力の育成」を掲げ、すでに週4時間体制で英語の授業を行っている。本校での取り

組みを例に、週3時間から4時間に増えると授業がどう変わるかを述べていきたい。

本校での授業の持ち方は以下のようになっている。

どの学年も週3時間を教科書を使った基本的な授業、1時間をスピーチやディベートのような発展的な発表活動の時間にあてている。週4時間になると、1時間を発表活動の時間として使いやすくなり、「話す力」を伸ばす発展的な活動が期待できる。この時間が充実すると、スピーチなどの原稿を書くことによって「書く力」を、発表を聞き要点をメモすることにより「聞く力」を伸ばすことにつながる。

このように、発表活動の時間が保証されると、「まとまりのある一貫した文章」を話したり、書いたりする経験を持った生徒が増えることが予想される。高校でもこうした発表の機会を与えていただくと中高の連続性が出てくる。

**5. 新指導要領ポイント②**

**～4技能+1を伸ばす授業とは**

週3時間では教科書指導もなかなか余裕をもって取り組めないという声はよく聞く。多くの学校が、教科書の理解から音読、最後に文法の確認で終わることが多いようだ。週4時間になれば教科書指導にも余裕ができ、表現活動を取り入れるこ

		必修週4時間			
		1	2	3	4
中1	時間	JTE		TT (JTE) or 少人数	TT (ALT)
	授業形態	A先生		A先生+C先生	C先生+ALT
	担当	教科書を中心とした授業			
	内容	Speech, Skit			
	使用教材	教科書、Let's Enjoy Bingo, たてよこドリル、Basic Grammar in Use			
		必修週3時間			全員選択週1時間
中2	時間	1	2	3	4
	授業形態	JTE		TT (JTE) or 少人数	TT (ALT)
	担当	B先生		B先生+A先生	A先生+ALT
	内容	教科書を中心とした授業			
	使用教材	教科書、Let's Enjoy Bingo, たてよこドリル、Basic Grammar in Use			
		必修週3時間			実践英語週1時間
中3	時間	1	2	3	4
	授業形態	JTE		TT (JTE) or 少人数	TT (ALT)
	担当	C先生		C先生+高校籍の先生	B先生+ALT
	内容	教科書を中心とした授業			
	使用教材	教科書、Let's Enjoy Bingo, たてよこドリル、Basic Grammar in Use			

とが可能になる。この表現活動が、4技能を総合的に伸ばすための土台になると考え、本校では週3時間の教科書の指導の中にOral Presentationという表現活動を取り入れ、4技能の総合的な育成を目指している。(下図参照)「書くこと」「読むこと」を充実させ、力を付けさせるには、その他の技能(特に「話すこと」「読むこと(音読)»)が土台になり、4技能のバランスをとっていくことが肝要なのである。

### <教科書を中心に4技能を育てる>

Oral Presentationは、教科書の内容をリプロダクトし、絵を使って発表する活動である。発表の中では、聞き手に質問をしたり、自分の意見や考えを述べたりする。また、'○○ said○○ but I think ○○.' や 'I agree with ○○.' といったスピーチやディベートにつながる表現も計画的に導入し、週1時間のALTとの発表活動の時間の土台も作ることができる。感想や自分の考えを言うためには、本文の内容をしっかりと理解しなければならない。発表のために何度も教科書本文を読み直し、意味の分からない表現はしっかりと調べるようになる。また、キーセンテンスや5W1H

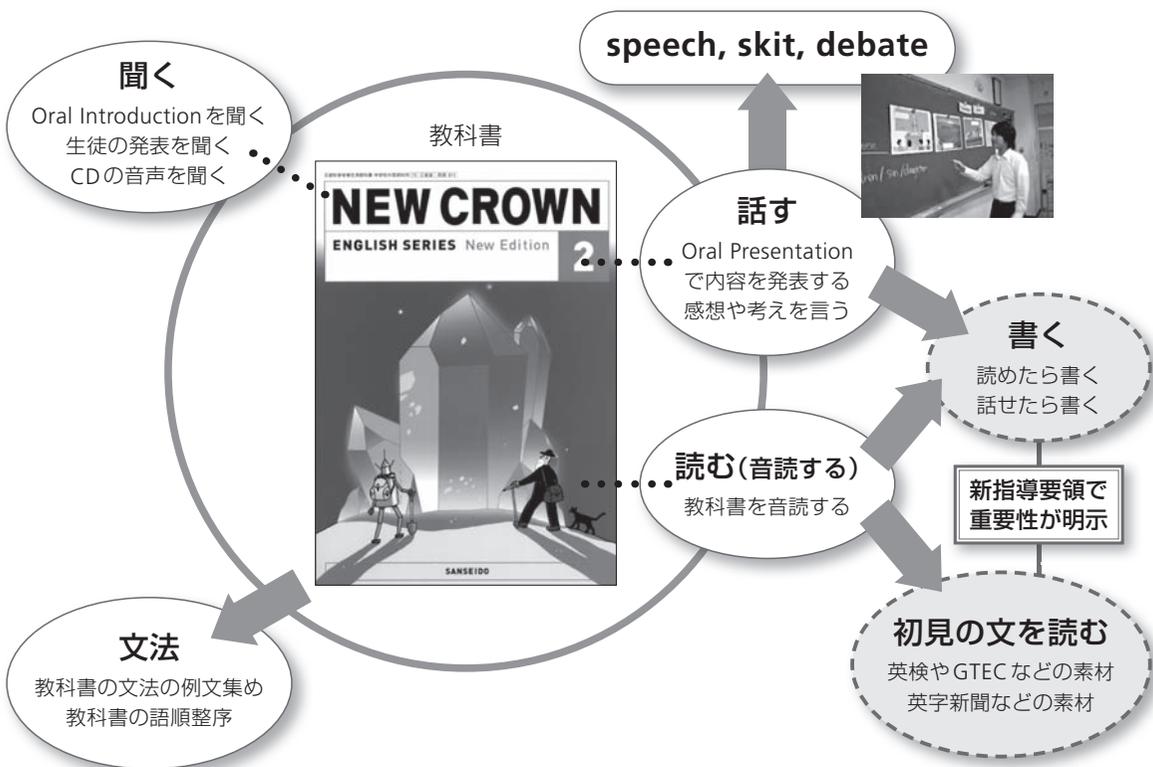
や代名詞を的確につかむことができるようになるため、初見の文章でも内容を素早く理解することにつながる。教科書の指導のゴールに表現活動を入れることによって、結果的に4技能を総合的に伸ばすことにつながるのである。

このような活動を経験する生徒が増えれば、高校でもリーディングの授業などで、絵を使って内容をリプロダクトさせたり、感想や意見を言わせたり、英語で要約させたりと発展的な活動につなげることができる。

このような力は大学入試の自由英作文でも求められる力であり、実際に東京大学では過去に右ページ図のような出題があった。

これらは中学校でも教科書のOral Presentationから発展できる活動である。

授業の内容を正確に理解し<情報を収集する能力>、適切な英語を用い<情報を発信する能力>、そして内容についての自分の考えや感想を述べる<情報を検証、評価する力>といったいわゆるPISA型読解力で求められる力は、4技能の育成と共に意識して育てていかなければならない第5の技能と言ってもよい。





次の絵に描かれた状況を自由に解釈し、30～40語の英語で説明せよ。(2005年前期日程)



次の絵に描かれた状況を自由に解釈し、40～50語の英語で説明せよ。(2008年前期日程)

## 6. 新指導要領ポイント③ ～「発信力」の育成

「発信力」を育てていく土台を、教科書を使った授業で築いていき、その先にディベートなどの骨太で実践的な活動に挑戦させたい。昨年度、中学3年生では‘All junior high school should serve school lunch’という論題でディベートに挑戦した。準備の過程では、＜情報を収集する能力＞として様々な検索を行い、＜情報を発信する能力＞として適切な英語表現を学び、＜情報を検証、評価する能力＞として、自分たちや相手の情報や論拠の信憑性を考えることを繰り返した。3年間 Oral Presentation で鍛えた力をディベートという実践の場で生かすことになる。3年間の積み重ねを自信に、彼らの発する英語には力があり、自信に満ちあふれた態度で気持ちよさそうに英語を話していたのが印象に残っている。

全ての学校でディベートを行うのは難しいかもしれないが、＜情報を収集する能力＞＜情報を発信する能力＞＜情報を検証、評価する能力＞を意識したスピーチなどの発表活動を目指したい。

高校でも、これらの力を意識した論題を使ってスピーチやディスカッションを行うと、中学との連続性が出てくる。ここでも、大学入試の自由英作文のテーマが使える。例えば2008年の東京大学の前期日程では「今から50年の間に起こる交通手段の変化と、それが人々の生活に与える影響を想像し、50～60語の英語で具体的に記せ」といった問題が出題されている。このような問題を参考に論題を選ぶと、大学入試ということもあり、生徒の動機付けにもなる。

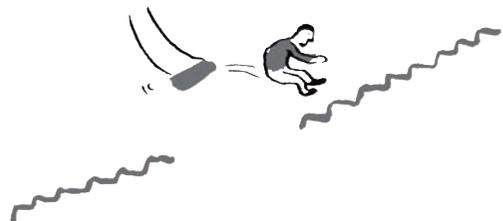
## 7. 一貫した英語教育を目指して

本校では、中学の英語担当の教員3名は全員、同じ目標、指導手順でほぼ英語で授業を進めてきている。表現活動を重視した授業形態だが、GTECや英検の結果を分析すると、どの学年も、「聞く力」に加え、「読む力」や「書く力」が大きく伸長している。結果的に4技能のバランスがとれた状態で高校に送り出すことができた。文法項目の整理や長文の精読など、中学で欠けている項目については高校の先生に引き継ぐことができている。このように、生徒が身に付けている力が見えてくると学校間の接続はスムーズになり、入口での指導方針や目標を決めやすい。

つまり、中高だけでなく、小中高大といった全ての学校間がスムーズに接続するためには、どんな英語の力を児童、生徒、学生に付けさせたいかを Can Do としてお互いに目に見える状態にする必要があるのである。新学習指導要領にはその道標としての役割を期待したい。また、それぞれがお互いの Can Do や授業を知ることによって、入口と出口の授業が連携を意識したものによっていき、一貫した英語教育の姿が期待できる。それに伴い、中学の英語の授業が変わっていき、高校へとスムーズにつながるものになるよう努力していきたい。

### 【参考文献】

「第1回中学英語に関する基本調査」  
(2009 ベネッセ教育開発センター)  
[http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu\\_eigo/kyouin\\_soku/index.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/kyouin_soku/index.html)  
東京大学入試問題 (2005年、2008年)



## —高校の授業はこう変わる—

## アウトプット活動を伴うリーディング指導



大阪府立寝屋川高等学校  
平尾一成



## 1. はじめに

今回の学習指導要領の改訂にあたって、文部科学省は、国際的な指標において日本の子供たちの読解力が低下していることを憂慮し、子供たちの「言語力」育成に力を入れている。高等学校の学習指導要領では、英語や国語だけでなく、全ての科目にわたって横断的に「コミュニケーション能力」の育成を重視している。また、高等学校の外国語科（英語）の目標として、「情報や考えなどを的確に理解し発信するコミュニケーション能力の育成」を掲げている。つまり、単なる技能の獲得よりも、内容伝達の道具として「英語力」を捉えているのである。

新設の科目となったコミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲでは、目標を「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を基礎的なレベルから伸ばし、最終的には社会生活で活用できるようにする。」と定め、具体的な内容として次の4点を示している。

- ア 事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。
- イ 説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読暗唱を行う。
- ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる。
- エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや

経験したことに基づき、情報や考えなどについて、（簡潔に書く）まとまりのある文章を書く。

（コミュニケーション英語Ⅱより）

このように、「聞く・読む・話す・書く」の技能を総合的に指導するという考え方は、現行版指導要領の英語Ⅰ・Ⅱの指導内容でもあり決して新しいものではないが、ほとんどの高校では依然として文法訳読中心の授業が行われているという実態を受けて、今回の改訂で改めて「4技能を統合する」ということが強調されたのである。

しかし、新学習指導要領で「4技能統合型の授業」や「コミュニケーション英語」という科目名をいくら強調しても、現場の授業が変わらなければ意味がない。また、これまで経験のない先生方に、「英語で授業を行うことを基本とする」と言っても、混乱を招くだけである。本稿では、セルハイ研究の経験を基に、現在も寝屋川高校で継続的に実践している授業内容を紹介し、新学習指導要領の下で行う授業について皆さんと一緒に考えてみたいと思う。

## 2. 寝屋川高校のセルハイ研究

筆者の勤務する寝屋川高校は、平成18年度より20年度までの3年間、文科省よりセルハイの指定を受け、「国際社会に活躍する人材に求められる英語力の育成」という研究開発課題のもと、「リーディングを基軸とした英語による知的コミュニケーション能力の育成」を旨とした。「知的コミュニケーション能力」を「国際社会に生きていく上で必要とされる社会的・文化的論題に対する情報処理能力・論理的思考能力・発表及び発信能力」と捉え、主に次の2点を研究の柱とした。

①知的課題情報やメッセージを読みとる力の育成  
インプット段階の指導

- 教科書の英文と同一の題材を扱う他の英文を読むことにより、情報やメッセージを様々な観点から読みとる力を育成する。

インテイク段階の指導

- 様々な課題に関する英文話題を異なる視点から比較検討し、様々な観点から物事を深く思考し、情報やメッセージを整理して読み取り、まとめる力を養う。

②知的レベルを高めた情報・メッセージを発信する力の育成

アウトプット段階の指導

- サマリー・ライティングなどの活動を通して、知的課題の文章構成に留意し、整理して発表・発信する力を育成する。また、読みとった情報やメッセージを分析し、さらに自分の考えをまとめ加えさせることで、より高い知識レベルの発信を行う力を育成する。

セルハイ研究が始まり、寝屋川高校の授業は、いわゆる受験指導中心の授業から発信型の授業へと転換していった。研究内容の柱である、「知的課題情報やメッセージを読みとる力の育成」と「知的レベルを高めた情報・メッセージを発信する力の育成」の2点を軸に、インプット→インテイク→アウトプットの流れを意識した授業作りに取り組んだ。

### 3. 寝屋川高校の授業

それでは、現在、寝屋川高校で行われている授業の内容を具体的に紹介しよう。本来なら教案や実際のワークシートを提示しながら述べるべきなのだが、紙面の都合もあり、今回は授業の流れと各活動の考え方を述べるだけにとどめたい。

英語Ⅰ・Ⅱの授業では、情報処理のステップに応じて様々なタスクや活動を設定し、教科書の内容を段階的に理解させるよう指導している。各段階において、英文に何度も触れながら言語材料の定着を図り、テキストに書かれている課題や問題、筆者の意図やメッセージを整理して読み取る力を育成している。また、読解の目的を明確にす

るため、サマリーやオピニオンライティングなどのポストリーディング活動（読解後の活動）を設定している。以下に具体的な活動を授業の流れに沿って述べていく。

まず、インプット段階の指導である。

#### リスニングインプット

##### —構造マップを利用したオーラル・イントロダクション

絵や写真などを見せながら話題や背景知識の導入を行うのが、一般的なオーラル・イントロダクションだが、本校では構造マップを利用してオーラル・イントロダクションを行っている。英語の論理構成を理解させるため、教科書のキーワードや要点を図式化し構造マップにまとめていく。このように、構造マップの作成法を黒板上に示すことにより、生徒が自分で構造マップを描けるよう導いていく。構造マップは、論理的な文章を話したり書いたりする上で大切な技術となる。

#### リーディング・インプット①

##### —大まかな理解のための活動

オーラル・イントロダクションで得たスキーマ（背景情報や語彙・文法情報）を足がかりにして教科書の読解活動に入っていく。First Readingとして、CDや教員の音読に合わせて黙読を行う。読み取るポイントを明確化するため大まかな内容を問う質問を与え、細部にこだわらないトッダウン・リーディングを指導する。

#### リーディング・インプット②

##### —詳細な理解のための活動

First Readingが終われば、正確で詳細な理解活動に入っていく。生徒にテキストの内容を整理して読み取らせるため、質問の種類・レベル・順序に配慮したプリントを作る。例えば、(1) 事実、問題、課題を尋ねる質問、(2) 理由や根拠を尋ねる質問、(3) 生徒の経験をもとに考えを述べさせる質問、の順番で与える。生徒の理解を段階的に深めるためには質問の種類と順序は重要なポイントになる。質問は、日本語で提示する場合と英語で提示する場合があるが、英問英答の落と

し穴（英語の質問に対する答を文中から抜き取るだけで、生徒は意味をわかっていないという状況）を避けるためには、日本語の方がよい。正解を確認するときは、まず生徒同士に話し合わせ、なぜその答えになるのか相談させれば、生徒に気づきが起こり、思考活動が活性化する。

### リーディング・インプット③

#### —スラッシュ対訳シートで文法説明

大まかな理解、詳細な理解が終われば、細部の意味確認と文法・構文の説明を行う。スラッシュ対訳シート（スラッシュの入った英文の下に、日本語訳を並べたもの）で、難解な英文の意味理解と説明を行う。難しい箇所はセンテンス単位で空欄にしておき、生徒に訳を考えさせる。このシートで能率よく説明を行えば、音読練習やアウトプット活動の時間を確保することができる。また、このシートを音読練習で再利用し、意味と音声のマッチングを効率的に行う。学習の初期段階で、このようなステップを飛ばすと、音読が意味のない活動になり、コミュニケーション活動を行うおうとしてもうまくいかないことが多い。

次に、インテイク段階の指導であるが、この段階ではアウトプット活動がスムーズに行えるよう言語材料の定着と情報の整理を行う。

### インテイク①

#### —音読で言語材料の定着

音読は、直読直解や直間直解の習慣を育て、リーディングやリスニング力の向上に効果があるということが多くの研究から分かっている。「読む」活動を他の技能へ発展させ4技能統合型の授業を行うためには、音読活動は必要不可欠である。音読の種類と順序に配慮して繰り返し練習すれば、語彙・熟語・構文・文・文章内容が定着しライティングやスピーキング活動で使えるようになる。時間がないという理由で音読活動を省略したり、数回のリッスン・アンド・リピートにとどめたりするケースがよくあるが、アウトプット活動を成功させるためには、リード・アンド・ルックアップを中心とした読指導が必要である。まず、リッスン・アンド・リピートで発音指導を徹底し、CD

の音に重ねて読むオーバーラッピングでリズムや抑揚を練習させる。その後、バズリーディングで個人練習を行い、ペア・リーディングに移る。ペア・リーディングでは、スラッシュプリントを見ながら一人がスラッシュ毎に日本語を読み、もう一人が英文を読む。この活動で英語と日本語を能率良くマッチングさせた後、リード・アンド・ルックアップで英文を脳に沈めアウトプット活動へ繋げる。

### インテイク②

#### —構造マップの作成

内容理解が終われば、文章の論理構成を整理するために構造マップを作成する。最初から自分で作成するのは難しいので、1年生の初期段階では教員が作成した枠組みをワークシートとして与え、その中に著者の主張、根拠、具体例、現状、問題点、解決策などを英語で書き込む。学年が進むにつれて自分で作成できるように指導し、3年生の入試長文読解演習でも、構造マップの技術を応用する。

アウトプット活動では、情報や考えなどについて、話し合ったり、簡潔に書いたりする能力を基礎から積み上げていく。

### アウトプット①

#### —ペアQ&A

各パートの内容理解が終われば、ペアQ&Aを行う。Q&Aと言えば、教員が質問し生徒が答えるというのが一般的な形であるが、この方法では全ての生徒に答えさせることはできない。ペアQ&Aなら、同時に多くの生徒がQ&Aに参加できる。異なる質問とその答が書かれている2種類のプリントを用意し、ペアで交互にプリントから質問を読み上げる。答える側の生徒は、教科書を見ずに内容を思い出して答える。答えに詰まるようであれば、質問する側の生徒がヒントやキーワードを言い助ける。初期の段階ではこの方法がよいが、徐々にステップアップし、生徒が質問を作る創造的なペアQ&Aへ移行する。生徒が自分で質問を作ることができれば、インタビュー活動などのコミュニケーションカティブなスピーキング活動が可能になる。

## アウトプット②

### —ストーリー・リプロダクション

このストーリー・リプロダクションという活動は、読んだ英文の概要や要点を教科書やノートを見ずに英語で再生する活動で、口頭で行う場合と書いて行う場合がある。音読で取り入れた語彙、文法、構文などの知識を実際使用することにより、「使える知識」として定着させることを目的としている。そして、基本事項を定着させるばかりでなく、書く（話す）べき内容を自分で取捨選択し、既習事項や自分の持てる英語力全てを使いながら行うので、格好のアウトプット活動になる。言語知識を定着させ、自分が伝えたい内容をまとめる、このような活動はコミュニケーション力の基礎を作るうえで効果が高い。全てのパートで行うと時間が足りなくなるので、重要なパートやパラグラフを選んで効果的に行うようにする。

## アウトプット③

### —サマリー・ライティング

課全体の指導が終われば、読んだ内容を構造マップで整理し、サマリー・ライティングを行う。できるだけ簡潔なサマリーが書けるよう、例えば「50語程度でレッスン全体をまとめなさい」など少ない語数制限を設ける。また、自分の言葉でサマリーが書けるよう導くためには、いったん日本語でまとめるステップを入れるとよい。

## アウトプット④

### —追加教材と意見構築

生徒の考えを広げ、複数の視点から物事を捉える力を育成するため、教科書の内容に関連する追加教材を与える。この教材は、他社の教科書やインターネットの情報をもとに、ALTが作成するオリジナル教材である。教材を作成する際、教科書よりも易しい英語を使用し、生徒がある程度早く読めるようにする。複雑な内容のものではなく、教科書の情報を補うものや、明らかに反対の立場を示すものを与えるようにする。教科書の内容と追加教材の内容を比較検討し、題材のテーマを複眼的に思考し、自分の意見をまとめるよう指導する。意見を書くときには、自分の主張と根拠を必ず示し、根拠を裏付ける事実やデータを付け加え

させる。教科書を読んだ直後にいったん意見を書かせ、追加素材を読んだ後にもう一度書かせると、書く内容が質的・量的に向上する。意見を書いた後は、ペアやグループで発表し、お互いにコメントを書いて評価し合う。

## 4. おわりに

以上が、寝屋川高校で行っている授業の概要である。自分の授業スタイルを変えることは容易なことではないが、部分的に取り入れていただければと思う。私たちも試行錯誤でセルハイ研究を行い、現在も日々改善を試みている。何事も一人で行うのは難しいが、みんなで協力して行えば良い考えも浮かぶ。本稿でお伝えした内容が、新学習指導要領下における授業実践の手がかりになれば幸いである。



📖 特集 新学習指導要領：新しい授業を目指して

—高校の授業はこう変わる—

# 英語による授業「教える」から「学ばせる」へ



北海道札幌国際情報高等学校

木村純一郎



## ●はじめに

私は英語教師であり、自分の仕事は、50分間教壇に立って高校生に英語を教えることである。

その観点から考えると、その50分の仕事が楽であるに越したことはない。しかしながら、何をもって楽とするか？ この辺が各教員間で意見の異なるところだろう。私の場合、不快を感じず、楽しく教えることができることが「楽」である。そのためには、準備の時間がかかることも厭わない。逆に、不快を感じながら楽しくない授業をすることは、大いに自分の精神を萎えさせ、「苦」となる。

昨年3月に新学習指導要領が告示され、「英語Ⅰ・Ⅱ」だったものが「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」となり、名前の示すとおり「コミュニケーション能力」を養うことが、英語を学ぶ最大の目的であるということが強調された。「強調された」としたのは、現行の学習指導要領においても同じ事が謳われているからである。しかしながら、今回の「強調」の背景として、現学習指導要領が発表されて以後も「英語教育の現状」には大きな変化がなかったという現状分析があるものと思われる。今回の新指導要領にはさらに「…次のような活動を英語で行う」と記述があり、「英語は英語で教える」という基本方針が示されている。「目標」が明確に設定され、今回はさらにその「方法」までもが示された。英語教員の中にはこの動きを不快に、あるいはプレッシャーに感じる人も少なくないのかも知れない。なぜなら、われわれ英語教員の多くはこのような英語の授業を経験していないからである。

さて、私自身はこの動きをどう考えるか？

この動きは、「50分間教壇に立って英語を教える」という自分の仕事を「楽」にするのか「苦」にするのか？ ここではそれを考えていきたい。

私が勤務する北海道札幌国際情報高等学校は、平成13年度から3年間Super English High School (以下SEL-Hi) に指定された。SEL-Hiとしてのスタートにあたり、「コミュニケーション能力を養う」授業方法について様々な議論がなされたが、大きな柱として「英語で英語を教えること」を選択した。今でこそ、All Englishの授業など珍しくないが、当時としてはかなり思い切った挑戦であった。以後、今日に至るまで「英語を英語で」教え続けてきた。

「英語で英語を教えること」について考えていく前に、誰もが口にする疑問について私なりの考えを示しておきたい。その疑問とは、「英語を英語で教えて、受験実績に悪影響しないのか？」というものである。私の知る限りでは、「英語で英語を教えること」は、受験実績により影響を与えることはあっても、悪く影響することはない。これについては、多くのSEL-Hi高やその他の学校の結果がよく示している。そうでなければ、文科省も今回のような大胆な指示をすることはできなかったのではないかと？

もちろん「受験」を無視した授業をしていたわけではない。「英語で英語を教える」授業形態でも、受験で結果を出す指導は出来るのである。つまり「英語で英語を教える」と「受験指導」は、相反しないのだ。英語検定やTOEIC等とセンター試験を同じように考えるわけにはいかないが、これらの検定で好結果を出せる者は、センター試験でも同じような結果を出せるということもまた事実なのだ。「二兎を追う者は一兎をも得ず」という諺があるが、「二兎を追わぬ者は二兎を得ず」とも、また言えるのではないかと？

以上、前置きが長くなってしまったが、いよいよ本論に入りたい。

## ●授業が面白くなる

「英語で英語を教える」授業においては、授業自体がより「面白い」ものになる。いや、面白いものにせざるを得なくなるのだ。「訳」という従来の授業の多くの部分を占めていたものが無くなることによって、教師は生徒の注意を引き付け続けるために、別な方法を模索せざるを得なくなる。そのことによって、教師は自分自身の授業を組み立て直すことを余儀なくされるのだ。また、自分が英語で表現することを生徒らに分からせるためにも工夫が必要となる。例えば、Crown English I の Lesson 2, Section 1 の最初の部分

I went to America for the first time when I was sixteen. Nowadays many young people go abroad; things have changed a lot since I was a boy. To me America was a strange, far away land. However I had a dream to cross the ocean by ship and to hitch hike across America.

では、

I went to America for the first time when I was twenty-nine. Nowadays, many young people go abroad. I know some of you have already been abroad. Things have changed a lot since I was a boy. I took a plane for the first time when I was eighteen. I came to Sapporo, this city on a school field trip when I was in junior high, as I lived in a small town Ashoro in the eastern part of Hokkaido. To me, America was a strange and far, far away land, of course. However, I had a dream to cross the North American continent some day by motorcycle. (下線部は大げさに抑揚をつけて話す部分) などということ話し、同時に自分がオートバイで北米を横断した際の写真を見せる(全員から見えなくとも良い—authenticityを上げるための工夫に過ぎない)。

この話を用意するに当たってほとんど無意識に、私は話自体を面白くすることによって生徒に自分が話すことを理解させるよう留意している。そのためには、authenticity(私が北海道東部の足寄町出身であることも、29歳で初めてアメリカに行ったことも、オートバイで北米大陸を横断

したことも、全て事実である)や、実際のコンテキスト(生徒のなかに外国に行ったことがある者がいること、自分たちが札幌にいることなど)をうまく使うことを心がける。私の話が彼らにとって「聞く価値のあるもの」即ち meaningfulなものにする努力をするのである。これもまた「面白さ」の演出である。

「面白い」ことは、生徒の前に差し出すことさえできれば、後は生徒が勝手に学んでくれるのである。

## ●コミュニケーションが授業の中心になる

上記の活動の最大の目的は、生徒との「コミュニケーション」である。英語という「器」を使い「自分」という「中身」を入れて生徒に発信し、受信させようとしているのだ。生徒が私の話を楽しんで聞き、「へえ」とでも反応すれば、それは即ちコミュニケーションが成立したことを意味する。既に何度も触れたように、「英語で英語を教える」授業においては、面白さの演出が不可欠であり、それはよりよく生徒とコミュニケーションすることによってもっとも良く実現されると考える。

上記の Crown English I Lesson 2, Section 1 では、現在完了形が使われている。

Things have changed a lot.

これを「現在完了の4つの用法のどれだ? 完了か、継続か?」などと教えるのではなく、生徒をペアに分けて

Have you ever been abroad?

Have you already eaten your lunch?

How long have you lived in your town?

などの質問をお互いにさせることで現在完了の使い方を学ばせる。現在完了に関して言えば、「訳」をもっては教えられないものなので(Spring came. と Spring has come. は同じ訳になる)、特にこのような教え方は有効だと言えるだろう。このようにして一度導入した事項は、生徒との英語でのやりとりの中に取り入れていく。“Have you finished? — Yes, finished. / Not yet.”のやりとりが以後日常的に成されるようになるわけである。余談であるが、英語の先生方の中には、このやりとりを“Did you finish?”と過去形を用

いて行っている方が少なくない。これは従来の訳読式の限界を示す象徴的な現象である。

単語や表現を教える際にも訳は教えず、生徒とのコミュニケーションを通して意味を理解させる。例えば上記の文中に出てくる“cross”という動詞ならば、“I cross this classroom.”と言って教室を横断するとよい。上記の部分の直後に登場する“decision”という単語は、例えば

What should I eat this evening? Curry, ramen, or soba? I am very hungry, but I'm on a diet. Mmm...it is a tough decision. Mmm...O.K, I have decided. I made a decision. I will eat soba this evening, because I'm on a diet.

と言って説明する。もちろんdecide/decisionについて辞書を引かせなければならぬ。ただし、あくまで上記のような説明の後でなければならない。

訳をしていないだけで、教師が一方向的に教えていることに変わりはないではないか？ という向きもあろう。しかしながら、生徒に自然に「分かってほしい」と思わせ、楽しく「分からせる」ことが出来たならば、これはコミュニケーションと言えるのではないか？ 「対話」とは、必ずしも「双方が発話する」ことを意味しない。人間は言葉を使って頭の中でも「話す」（自己内対話）ものだからである。そもそも、授業そのものがコミュニケーションの一形態ではないか？

またまた余談であるが、最小限の物理的なアクションと一方向的な発話のみで、完全に聞き手の反応をコントロールしてコミュニケーションを成立させる芸を持つプロが存在する。落語家である。

## ●「量」が増える

「英語で英語を教える」場合には、日本語での指導に比べ、英語へのexposureが圧倒的に増える。“Listening”などと、あえて分けて考えなくても、生徒は常時、英語を聞くことになる。英語の授業において「プリント」「シャープペンシル」などという和製英語が使われることもなくなる。

テストについても量的な変化が生じる。「訳をする」という最も時間のかかる行為をさせない以上は、時間的な負荷を調整するために、設問の数

を増やさざるを得ない。さらに「授業を良く聞いていたかどうか」ではなく、「文章から必要な情報を得る能力」を試すことを意識すると、どうしてもセンター試験のような試験を作ることになる。私の場合は、定期考査では、B4の大きさでほぼ4枚分のものである。そのようなテストに慣れた結果として、生徒らはかつてほどセンター試験の量と時間的負荷を苦にしないようだ。センター試験もまた、現指導要領の趣旨に対応して変化してきた。同じ目的を持った指導法と試験の相性が良いのは当然と言える。

その気になれば、ハンドアウト上の言語もほとんどが英語にすることが可能であるし、校内放送を英語で行うことも出来る。教師側の想像力次第では、いくらでも生徒らが触れる英語の量を増やすことができる。何を学ぶにも「量」は重要である。「質」と「量」の積が「結果」だからである。

## ●「音」が重視されるようになる

これまで書いてきたように「英語で英語を教える」際には、「面白さ」を演出しなくてはならない。そこで、生徒がどのような活動を楽しんでいるかを考える。生徒は、英語の「音」が好きである。英語はキラリだと言う生徒も、音に関する活動は熱心に取り組むという者が少なくない。“One in a million” “Get it on” “Check it up”といった語句がどのように発音されるかを説明し、一緒に発音するだけでもかなり盛り上がる。口の前に紙をかざし“Power to the people”と発音し、紙を震わせて見せ、それを真似させると誰もが楽しそうにする。発音の上手な先生は、それだけで尊敬される。試しに、有名なスピーチや、映画のワンシーンなどをコピーさせて見ると良い。驚くほど熱心に取り組む生徒がいることに気付くはずだ。

これらのことを利用して授業に活かそうとすれば、当然、効果的に「音読」させることを考えることになる。その方法については多くの人が触れているので、ここでは詳述しないが、「上手に抑揚をつけて教科書本文が読めるようになったら、ある程度はその文を理解したと判断してよい」ということは、「英語で英語を教える」際に教師が知っておくべきポイントである。

「英語を英語で教える」場合には、音を重視し

た指導が極めて自然に行えるようになる。学んだことが、即、使われるようになる、あるいは常時使われているからである。

### ●Productionが重視される

言語を使ったコミュニケーションの結果として、生徒らが得たものは、それを彼らが消化して初めて意味を持つ。それを促すためには、彼らに「発信」させるのが効果的である。例えばCrown English I、Lesson 3は、人類の英知が文化遺産を消失の危機から救うという話であるが、生徒らの身の回りにある文化遺産がどのように保持されているか考えさせて見るとおもしろい。グループで討議させる方法もあるが、高校1年生では、多くの場合、英語で討議する力はまだ身につけていないであろうし、実際に発表させると非常に時間がかかる。私は、このような場合「ポスター・プレゼンテーション」を用いている。やり方は簡単、A3の紙を渡して「自分の好きな文化遺産を選んで、それを紹介するポスターを作れ、但し英語で」と言って宿題とすればよい。そして回収する際に、ごく短時間でそれらに対するコメントをつけ、良くできた作品には「This is great.」と言ってやる。そして、良くできたものも、そうでないものも全て教室の壁に掲示する。後は、生徒同士が勝手にお互いの作品を評価する。教員のコメントよりも、生徒同士の「へええ」とか「すげえな」という言葉が、彼らにとっては最大の評価になる。また、この活動を通して、彼らが英語で学んだ「文化遺産」についてさらに理解を深めることには疑いがない。

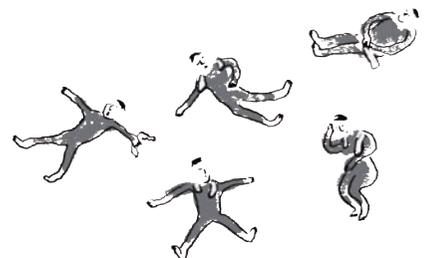
「発信」は、授業のあらゆる場面で意識される。先に触れたテキストの一文を使って、「I went to Tokyo for the first time when I was eight.」と言わせるのもまた、発信の一形態である。「英語で英語を教える」場合には、前述の様に生徒間、あるいは教師と生徒間で英語を使ってコミュニケーションする機会が増えるので、その際に「自分自身の言葉」を発信させることに腐心すべきである。当然、力がついてくれば、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート等の発信を含む活動を効率よく導入しやすくなる。ただし、これらの活動には時間がかかるので、あくまで基本は通常

の授業の中で「自分の言葉」を引き出すことにあると心得ておくべきだろう。

### ●おわりに

以上、「英語で英語を教えること」が、授業にどのような変化をもたらすかについて考えてきた。改めて振り返ってみると、「英語で英語を教えること」は、50分教壇に立って英語を教えるという私の仕事を、あるいは、より大変にしたかも知れないが、確実に「楽しく」した。論語に「子曰く、これを知るものはこれを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず」という言葉がある。これは正に英語教育にぴたりと当てはまる。「これを楽しむ者」は「自ら学ぶ者－自律的学習者」を意味しないだろうか? 「自ら学ぶ者」には、over teachingは禁物である。学ぶ楽しみを削ぐからだ。一方で、彼らに対しては、「良質な経験」を与え続けることが求められる。これからの英語教員には、「教える」から「学ばせる」へと態度の転換が必要となる。

「楽しむ」者を増やすという点においては、「英語を英語で教える」ことには、「大変さ」を引き受けてなお、取り組む意味がある。



## —高校の授業はこう変わる—

## 「自学自習できるような指導」を考える

岐阜県立揖斐高等学校

谷口雅英

## 1. はじめに

本稿では、今度の高等学校外国語学習指導要領第4款の内容の取り扱い、「(3) 辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること」に焦点を当てて執筆させていただきます。中学の新学習指導要領におきましても、「力辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること。」が謳われていますが、実態としましては、なかなか指導が十分になされていないのが現実です。

時代の中には、流行というものがあるようです。英語教授法もそうです。一時は一世を風靡したオーラル・メソッドも、徹底的に非難されるという時代がありました。現在、母語をできるだけ使用しない英語の授業が声高に叫ばれています。しかし、これも一種の流行の現象ではないか、つまりそちらの方に振り子が振り過ぎている状況にあると、私は考えています。

英語の授業で最低限身につけさせなくてはならないのは、今も昔も、辞書を使えば何とか英文を読み進めていける力ではないでしょうか。私の勤務校では、この最低限のことを身につけずに卒業していく生徒が、圧倒的に多いという現状があります。

そこで、辞書の指導の他に、すべての生徒が文法参考書を使いこなすこと、疑問文・否定文を作ることができることを目標に取り組んでいます。これらのことができない状態で、コミュニケーション能力の育成も何もないと思います。

## 2. 教え子の便りから考えたこと

昨年度末、教え子から、次のような便りをもらいました。

お久しぶりです。先生、お元気ですか。驚かれるかもしれませんが、私は今、フィリピンでもセブという小さい島にいます。とても安全なのんびりとした国です。マニラとはかけ離れた国だと思います。

今、韓国人、フィリピン人、日本人と生活しています。この国のいい所は物価がアジアの中でもダントツに安いところです。こちらの人々の給料も恐ろしく安いです。だいたい1日の日給が400円とかで月給1万円くらいです。実際に本当に貧乏な国です。

しかしセブの人々は本当に心が温かくて、人と人との間に壁というものが存在しません。日本のハイクオリティは本当に素晴らしいと感じるようになりましたが、日本が失っているもの、物の大切さも、同時に本当に考えさせられます。フィリピン人の友達も何人かできて、旅行ではなく留学しなければ見られなかった事が沢山ありました。

フィリピンは生活してく上でけっしていい環境ではないけれど、その生活に直に触れたことが自分の経験としてすごく大きなものになりました。こう言うのはセブの人々に失礼ですが、自分の上ばかりを見るのではなく下を見れたことで、自分の価値観がまた変わりました。

彼らは日本に対してすごく憧れをもっているけど私も彼らを尊敬できると思えた事、心の差や国の力の差など韓国人やフィリピン人と様々な比較ができたことのすべてが勉強になって、ここへきて良かった！と思えました。

海はほんとに綺麗で是非見てほしいですが、逆に見どころが海しかなく旅行として来るとなにもない島なので退屈だと思います。……

彼女は高校時代、英語が苦手で嫌いな生徒でした。英語学習にも前向きではありませんでした。そんな生徒が海外で英語を勉強しているのですから、大変驚きでした。書いてある内容も知的です。日本、世界そして自分を見つめ、考える視点があります。少なくとも、海外旅行でショッピングやグルメに明け暮れるようなレベルではありません。

彼女が英語を勉強しようという気持ちになったきっかけは、家族で行った海外旅行で、英語ができることのすばらしさを痛感したようです。ニュージーランドでワーキングホリデーの制度を利用しながら、1年くらいファームステイすることを目標に英語の勉強を始めました（彼女は農業高校動物科学科の卒業生です）。日本の英会話学校に通っていましたが、学校に収める1ヶ月の授業料程度で、フィリピンに1ヶ月滞在できることを知り、渡航を決意したそうです（フィジー島も同じくらいの費用で滞在できるとか）。そして、今フィリピンに魅せられているという状況です。

教え子の便りを読んで、動機づけがいかに大切であるかを痛感しました。2009年6月に放映された日本テレビ系の『地球便』という番組で、マレーシアで最も評価の高い日本料理レストランを経営する大阪府八尾市出身の38歳の青年を取り上げていました。彼は中学校のとき両親が離婚し、高校へ行かないで料理の世界に入りました。高校へ行った同級生に負けたくないよう、彼は日本料理の世界で修行を重ねました。自分の店を持つとした当時、マレーシアのランカウイ島には日本料理のお店が一軒もなかったことを知りました。独力で現地の言葉を習い、今は数人の現地の人を使いながら、マレーシアでNo.1の日本料理レストランを経営しています。

大学入試などの強い動機づけを持っていない生徒に対して、特に英語に強い苦手意識がある場合、動機づけを行うことは大変難しいと思います。そのような生徒に対して最も大切な指導は、「学び方を教えること」だと思います。今は必要性など全く感じていないけれど、必要性を感じたとき、改めて英会話学校などへ行かなくても、自分で学習していける力を身につけさせることです。教え子や番組に登場する人たちを見ていると、言語を真に身につけたいという環境になったとき、人間は想像もできない力を発揮するようです。

### 3. 辞書を使いこなす指導

辞書を使って英文を読み進めることができる力の育成として、2つの段階を考えました。第1段階は、調べたい単語を正しく早く検索できる段階、第2段階は、検索した箇所から適切な意味を

選択できる段階です。どちらの指導にも、全員が同じ辞書を購入すると大変効率的です。本校では、『エースクラウン英和辞典』（三省堂）を生徒全員に持たせています。この辞書は、見やすさ、引きやすさ、基本語彙の説明、収録語彙数、付録の充実、価格という点で、同程度の他の辞書を凌駕していると考えています。

授業では、1時間に1回は辞書を引くような展開を考えています。辞書引きについては、単調な作業を活性化するために、競争の原理を取り入れています。辞書を引かせるときは、全員起立させ、第1段階の指導では該当する単語を引いたら着席、第2段階の指導では該当する意味を見つけ、それが正しいときに着席を許可します。

第1段階の指導では、1つの単語について、発音記号と読み仮名と最初に書いてある意味を書き込む作業を30秒以内に行えることを目標としました。発音記号と読み仮名を書かせたのは、並行して発音記号の指導も行っていたからです。ワンランク上の辞書や多くの英語教材には読み仮名はついていません。自学自習するために、発音記号を読めることも必要と考えました。

1学期の中間考査まで、5分で10個の単語を引くことという作業をほぼ毎時間行います。GWの課題として、100個の単語を引かせます。GW前にはこの目標をクリアできる生徒は皆無でしたが、GW直後には各クラス数名ずつ目標をクリアし、1学期中間考査直前にはクラスの半数以上の生徒が目標をクリアできるようになります。

中間考査以降は、第2段階の指導に入ります。この指導には「記号づけ」の指導が効果的です（寺島1989参照）。記号によって英文の構造が浮き彫りになり、どの品詞を検索すべきかわかりやすくなります。といっても、指導はなかなか大変です。品詞で言えば、私自身も高校で辞書を引くようになってから、やっと理解できたというのが本当のところだと思います。しかし、外国語を学ぶためには、語順や品詞の理解は不可欠です。主語・目的語といった言葉の概念も理解させる必要があります。

1年の学年末までには、第1段階の指導は全員がクリアします。授業中、単語の意味を質問したときに、こちらが指示しなくても辞書を繰り出す生徒も多く出てきます。第2段階の指導はそんな

訳にはいきません。時間がかかるかもしれませんが、繰り返し行うしかないと考えています。

#### 4. 疑問文・否定文を作る指導

次に、疑問文・否定文を作る指導について考えます。外国語学習において、コミュニケーションの喜びを体験させることは最も大切なことです。しかし、たとえば相手に何かを尋ねるというコミュニケーションが達成されたとして、それが単に表現を暗記しただけで、他のことを質問する力が転化していない状態ではどうでしょうか。喜びは刹那的なもので、さらなる喜びを味あわせることは難しいでしょう。平叙文から疑問文を作ることができることは、コミュニケーションの観点から発展性があることは言うまでもありませんが、生徒にとって一時的なコミュニケーションができるより、はるかに大きな喜びを感じるのではと考えます。

では、疑問文・否定文を作ることができない状態で高校に入学した生徒に対して、どのように指導すればよいのでしょうか。これができるようになるためには、英文中の主語と述語動詞を指摘できなくてはなりません。述語動詞について言えば、be動詞と一般動詞の区別、助動詞と本動詞を指摘する力が必要です。そういう意味で、英語が苦手な生徒についても、基本的な文法用語はきちんと定着させる必要があります。

授業は、前もって英文をフレーズに分け、フレーズごとに意味を取り、一文の意味を考える訳読式です。各課のすべての英文を板書し、最低限必要な文法用語を使いながら、一文ずつ文構造と単語の意味を確認しています。一文の内容を理解したあと、すぐに音読に移ります。

日本のような言語環境で外国語を習得しようとすると、音読練習が欠かせないと考えます。しかし、やみくもに音読すればよいということではなく、英文の中の1つ1つの単語、句、節、あるいは段落の中の1文1文の意味や働きをしっかりと理解した上で、伝達内容を相手に伝える、あるいは自分自身に言い聞かせるつもりで音読をしなければ、あまり効果は期待できません。授業でもそのような音読の仕方を実践する必要があります。そのような学習方法を繰り返すことで、生徒

は外国語の学び方を学ぶことになります。

音読練習の後、暗唱練習に入ります。全員を起立させ、暗唱したら着席し、教師に暗唱した英文を発話します。数人がそれを達成したら、「このことを相手に確認するために聞いてみると」と呼びかけて、疑問文作りの練習を行います。指名して答えさせますが（席は常時、隣同士のペアになっていて、相談してもよいことになっています）、生徒にとって難しいのは述語動詞が一般動詞の場合です。一般動詞の疑問文はいきなり作らせるのではなく、述語動詞を強調する表現を間に挟みます。『VISTA English Series New Edition I』（三省堂）の第1課の例文を使うと、次のようになります。

We see mountains and oceans.

→ We do see mountains and oceans.

→ Do we see mountains and oceans?

その疑問文を全体で復唱すれば、疑問文作りの練習と音読を兼ねることになります。否定文についても同様です。

このような授業形態について、1文ずつが細切れになり、読みの楽しみがなおざりになってしまおうというご指摘があるかと思えます。確かに、そういう部分は否定できません。それを補うために、教科書よりもっと簡単で、単語の意味などがすべてヒントとして書かれていて、辞書など引かなくても読んでいけるような教材を別に準備する必要があります。また、教科書のすべての課を先ほどのような指導に充てるのではなくて、精読して疑問文・否定文作りと音読を徹底する課と内容理解に留める課とを、予め決めておいてもよいかもしれません。

文法参考書の指導について書くスペースがなくなりましたが、先ほどの辞書指導やここで述べた文構造を確認する指導の中で、品詞の識別や文法用語の定着を図る中で、授業で折に触れて使っていけば、辞書よりはるかに早く検索などはできるようになります。

#### 5. おわりに

昨年の3月に新学習指導要領が告示され、今ま

で以上に発信型の授業が求められているような内容になっています。また、今回はさらに、「…次のような活動を英語で行う」とも書かれており、これにつきましては新聞等でも話題になりました。この背景には、「学校で学ぶ英語は役に立たない」という社会からの見えない力が、教育政策を動かしていったという側面もあると思います。

こういった状況について鳥飼（2010）は、次のように述べています。

しかし、英語教員はそろそろ「言われっぱなし」を返上し、ありとあらゆる機会を捉えて、現場の実情、現実の課題を発信すべきではないか。発信力が必要なのは、生徒や学生だけでなく、教員も同じである。分かりやすく、論理的に、あきらめずに忍耐強く説得する力が求められている。

このような発信をするに当たって、寺島（2009）は、非常に有益な書籍です。賛否は別として、是非ご一読をお願いしたいと思います。

学校教育の目的は、教科内容を教えることだけでなく、学び方を教えることです。卒業後、自分で勉強していくことができるようにすることです。やったことがないことをしなくてはならないとき、人は最良の方法で自分を教育しなくてははいけません。その時、学び方を知らないと、新しいことに対処できません。一方、学び方を知っている人は、成功する可能性が高いと言えます。

外国語学習で言えば、それは英語という言語のみに通用するものでなく、先の青年の例が示すように、学習者が英語以外の外国語を習得しようとしたときにも、通用するものでなくてははいけません。中学・高校と英語が苦手で過ごしてきた生徒にとっては、むしろ英語以外の外国語の方がおもしろいかもしれません。英語に関しては相当の差がついてしまっていますが、それ以外の外国語では大学入試を通過してきた生徒たちとも、同じスタートラインに立てるからです。

高校を卒業すると、教科書というものがありません。自分で教材を見つけなくてははいけません。どんな教材でどのように学習するかということも自学自習する上で大切です。たとえば、歌は外国語を勉強する上で、とても有効な教材だと考え

ています。その学習方法などについて、谷口（2010）で書かせていただきました。興味がある方はご覧ください。

教室を英語が話されている空間に見立ててコミュニケーション活動を行うことは、必要だとは思いますが、日本という言語環境での自学自習の観点から見れば、日常の学習の成果を試す、発表するという、スポーツで言えば、試合に位置づけられるべきものだと考えます。最も時間を割かなくてはいけないのは日常の地道な練習であり、それを繰り返していくことによって、成果も表れ、生徒は学び方を学んでいきます。この地味な指導について、マンネリ化するのではなく、絶えずより良い指導のあり方を模索していくことは、コミュニケーションが声高に叫ばれる時勢の中でも忘れてはいけないと思います。

【参考・引用文献】

谷口雅英

「英語授業実践記録 歌を使って言語4技能を育成する」  
<http://www.shinko-keirin.co.jp/koei/english/jissen/32.html> (2010)

寺島隆吉

『英語にとって学力とは何か』（三友社 1989）  
 『英語教育が亡びるとき』（明石書店 2009）

鳥飼玖美子

『英語教育』3月号「現場から発信を」  
 (P41 大修館書店 2010)

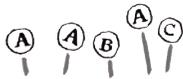


## —中高一貫校における授業—

## 英語を実際に使う授業の実践

法政大学中学高等学校

木村 越



本校は、2006年度から2008年度の3年間、文部科学省からSELHiの指定を受け、研究開発課題を「多面的なTBL (Task-based Learning) の導入により英語コミュニケーション能力が飛躍的に向上する授業法・教材選択・カリキュラムの開発」として取り組んできました。

今回はNEW CROWNを用いて行っている中学における指導実践について報告したいと思います。

### 1. 本校の英語教育の目標

本校は中・高6年間で「英語力と国際性」、「コミュニケーション能力」、「豊かな感性」を育てることを目標としています。具体的には、英語で書かれた内容、話された内容を正確に読み、または聞き取り、それに対して200語～300語で批評を書ける、または考えを述べるができる力を高校卒業時まで身に付けさせることです。

中学段階では、NEW CROWNを用いて様々なアクティビティーを行いながら、自らの考えを英語で話す機会を定期的に設定し、それに向けての準備活動を通じて、必要となる基礎力固め、実践力につなげていけるよう指導しています。

しかし、特別なカリキュラムではなく、中学1・2年生では英会話を含め週6時間、中学3年生では英会話を含めて週7時間となっています。教科書はいずれの学年もNEW CROWNを使用しています。先取りを意識したカリキュラムを組んでいるため、どの学年でも2学期には学年で学ぶべき範囲を一通り終えて、3学期に次年度の内容を見据えた発展的な学習内容を学ばせたり、それまで学んだことを実際に使わせながら発表する機会を確保しています。そのため、毎回の授業も訳読中心の形式ではなく、教師による講義型の授業から生徒活動型の授業になるよう心がけ、授業づく

りをしています。

また、本校では、中学2年の3学期に生徒全員がオーストラリア・アデレード語学研修に参加するプログラムがあります。この語学研修が英語学習の大きなきっかけの一つとなっています。

オーストラリア研修の前は、自分が現地に行った際に使うであろう英語表現を、実際の場面をイメージしながら学んでいきます。最初はぎこちなくしかできない表現も、繰り返し練習する機会を与えていくことにより、生徒達にも自信をつけさせることができます。これは特に英検3級以上の2次面接をイメージした取り組みに対しても有効となります。

また、語学研修から帰ってくると、自分が伝えたかったことがきちんと伝えられたという達成感を味わう一方で、もっともっと自分の意見を正確に伝えられるようになりたい、相手の話をきちんと理解し、世界の文化を深く知りたいという気持ちを持つようになります。多くの生徒がそのまま進学していく本校のような付属校の場合、なかなか明確な目標を持たせることが難しく、こうした機会は英語学習に対するモチベーションを上げていく上で大きな役割を担っています。

しかし、語学研修があるから英語を勉強するというわけではもちろんありません。語学研修は2008年度中2の生徒から実施しており、それ以前はそのようなプログラムがありませんでした。そのような中、本校が英語教育を単なる受験勉強のためのものではない、コミュニケーションのためのものであると位置付けてきた取り組みが英語面接です。

英語面接は、中学3年生の生徒に対して行っているものであり、卒業・高校進学にむけての取り組みとして位置づけて行っているものです。詳細

は後述致しますが、与えられたタスクに対して英語で答えていく形式です。以前は日本語教師で行っていましたが、現在ではネイティブ講師で行っています。自分の考えを発表することには、日本語でさえ少なからず抵抗を感じる生徒もいます。さらにそれを英語で行うということは生半可なことではありません。このことは大学を卒業した社会人であっても同じであろうと思います。初めての経験であれば、誰だって緊張するものですから、その経験を早い段階で、中学生のうちに経験させることができるのは、その後の生徒達の人生にとってみても大きな収穫であろうと思います。与えられたタスクに対してきちんとした準備をして、完璧にこなすことも大切なことですが、その一方で、うまくいかない、失敗する経験をさせてあげることも同様にこの時期の生徒にとっては大切なことであろうと思います。そういった意味でこの英語面接は、どのレベルの生徒にとってみても今後の自分について見つめ直すよい機会になっているのだと思います。

また、3学期には、スピーチコンテストを実施しています。中1は教科書で学んだHumpty Dumptyの暗唱、中2は「オーストラリア語学研修に向けて」というテーマでのスピーチ、中3は「夢」というテーマで100単語以上のスピーチをします。各クラスで全員参加による予選会を授業時間内で行い、生徒同士による採点と教員の推薦で選ばれたメンバーによる決勝を、スピーチコンテストとして全生徒の前で行っています。これは、生徒および教員の投票で各学年の優秀者を決める形式です。教科書を通じて学んだことを技術的に上手に表現するのではなく、むしろ、題材に対して自分の考えを持たせること、そしてそれらなるべく簡単な表現で（英語で考えて英語で）伝えられるように指導しています。

## 2. 具体的な実践

中1では、英語学習初期段階において個人を一人ずつ見ていく機会を設け、きめ細かな指導と学習意欲向上を図ります。英語を目で見えて覚えるのではなく、まず耳で聞くことから始め、それを声に出してみるという母国語を習得する際に行ってきた方法となるべく一致するように、聞く機

会、発音する機会を保証します。訳読中心の授業になると、どうしても教師による講義形式が中心となってしまいますが、生徒中心の授業形態を心がけることにより、生徒が英語を使う時間が増えます。また、訳読中心の授業よりもよりスムーズに授業を進めていくことができるのも特徴です。このことにより先取り教育が可能となっています。

一学期には教科書の音読テスト、二学期以降にはインタビューテストを実施しています。制限時間を設けての音読や、英問英答の練習を反復させます。教科書は、レッスンごとに日本語から英語に訳す事ができるように本文の音読を繰り返し行います。またインタビューテストは単語だけで応答するコミュニケーションの回避のため、文で応答する事、またYes、Noの他に、もう一文つけて発話するという条件のもとで行っています。

中2では、段階的に目標を高めながらスピーチの指導を行います。相互評価にコメント欄を入れることで、聞く側も集中し、フィードバックされたものを生徒に還元することもできます。自分のスピーチを周りの友達がどのように受け止めたのか、食い入るようにコメントを読みあさる姿が見られます。

本校では学習内容の先取りを実践しているので、どの学年も3学期は教科書で学んだことをベースにしなが、より実践的な内容に取り組みせています。中2では、3学期後半に控えたオーストラリア語学研修のための表現のトレーニングや、実際にホストファミリーと手紙などでやりとりをしながら体験的学習を進めていきます。

これら3年間の集大成として中3では、中1、中2で経験したスピーチコンテストの他に英語面接を行うため、表現することを主軸とした英語学習を以下のような取り組みで行っています。

### <暗唱>

NEW CROWNを用いて、教科書本文の暗唱を反復します。

- ①本文の予習（課題として事前に出しておく）
- ②リピート（教員の後に続いて読む）
- ③教科書を伏せてリピート。
- ④伏せた状態のまま日本語から英語に。
- ⑤5分から6分（内容に合わせて変更）準備時間を与えて暗記させる。

⑥日本語から英語にしたものをノートに書いていく。

⑦一人一文ずつ暗唱発表。その日の最後に全文を一人で暗唱発表

毎回の授業で上記の方法を用いて暗唱能力を少しずつ高めていきます。英語は個人で学習する部分と、コミュニケーションとして対人関係の中で育てていく部分と両方を持ち合わせているので、その両方の要素がなるべく含まれるように、個人で覚えたり、確認したりする時間を与えることと、それらを人前で発表することの両方を大切にしています。細かなミスをなるべく個人の確認の時間に済ませて（他の人には間違ったことがわからないようにしてあげて）、ある程度の自信をつけさせた状態で発表に持っていくことを大切にしています。また、1学期など学年の初期段階では、英語力がある生徒にまとめの発表をさせることで良い模範とし、同時に英語に興味がある生徒はどんどん先に進んでもらう機会とします。そうした中で、少しずつ生徒の中に自分もチャレンジしてみたいという気持ちを育み、これまでチャンスに恵まれなかったレベルの生徒にも発表をしてもらうように切り替えていきます。この段階になると、周りの生徒達も発表を聞きながら、自分も心の中で同様にチャレンジし、最後までできたときに自然と相手を褒めたたえる気持ちをもってくれるようになります。

また、英作文は毎回の定期考査で出題し、それぞれ100単語以上の内容で自分の考えを伝えるものになっています。テーマは教科書のレッスンで学んだトピックから、自分たちの学校行事などに関わりの深いものを選択して提示しています。

例えば、1学期であればオーストラリア研修から帰国したばかりですので、「オーストラリアで学んだこと」について、佐々木禎子さんのお話と、本校の修学旅行が広島、長崎の平和学習を行っているので、「平和とは」というテーマなどで出題しています。様々なことに対して自分の考えを英語で考え、英語で表現する癖を養っていきます。そして、それらが最終的に「自分の夢」というテーマにつながるように指導しています。原稿作りは、2学期中間試験で課題にし、仮原稿を完成させ、そのうえで、キング牧師のスピーチを聞かせ、

スピーチとは何なのかを学習し、原稿の直しを作らせませす（下書き）。その後、文法的な間違いなどを訂正し、清書を作成させませす。

この段階で、ネイティブ教師に生徒の原稿を読んでもらったものをインターネットのストレージなどを利用してデータ化し、生徒が自宅で自分で練習できる環境を整えます。生徒も自分の書いた原稿をネイティブ教師に読んでもらえることに対して興味があり、また、その後のクラス予選も控えているので何度も聞きながら練習していきます。

そして、本校が行っているペアレンツウィーク（授業参観）などを活用し、一度クラスメートや保護者の前で実際にスピーチをする練習をしています。

### 3. 英語面接について

上記のような準備期間を経て、本校ネイティブ教師との一対一の英語面接に移ります。これは、キング牧師の演説“*I have a dream*”の中からいくつか段落を提示し、それらを暗唱することから始まります。キング牧師に関しては、NEW CROWNのLesson 6を学ぶ際に、背景となる事柄に関してビデオ教材などを活用しながら学習し、そのうえでキング牧師の演説を実際に聞くことで、様々なことを実感してもらいます。音読とスピーチの違いを認識してもらいます。

英語面接で問われる内容としては、キング牧師に関する質問を英語で答えられるかどうかということと、“*My Dream*”を英語で伝えることの大きく2点です。キング牧師に関する質問については、ネイティブ教師と事前に打ち合わせをしておきます。ネイティブ教師は面接に対して集中してもらいたい意味もあり、英語面接の評価は第3者（学年の英語担当）が別に行っています。これは成績に直接反映されるものではありませんが、Certificate（修了証）を渡す形で評価にします。項目は大きく3つあり、accuracy（文法・語彙の使い方の正確さ）、fluency（流暢さ）、contents（スピーチの内容、発音）をそれぞれA（優秀）B（普通）C（乏しい）F（失格）で判定します。基本的には生徒の学習を励ます形で行っているため、よっぽどひどくない限りFはつけませせん。また、

実際に行ってみるとわかることですが、定期試験上位者が必ずしも良い面接をするわけではなく、逆にそれまで英語学習で活躍することのなかった生徒の意外な側面（実は英語が好きだった、コミュニケーション力に長けていた）に気づかされることとなります。ここには、日本人教師の生徒に対する評価とネイティブ教師の生徒に対する評価のgapもあり、非常に多くのことを学ばされます。

そして、スピーチの内容が“My Dream”ということで、自分の将来に関してどのように考えているのかを具体的にさせていくための質問を行っていきます。自分の夢に関してイメージを持つことができても、それをいかに実現させていくかについて無頓着な生徒が多いのも実態です。授業担当者、担任などの日本人教師から言われる以上に、ネイティブ教師から英語で淡々と問いかけられていく中で、生徒自身が自分の道について発見していく様子が見られます。

これらすべてを一人あたり10分ほどで行っています。本校では生徒数が1学年約140人ほどですので、1400分＝23時間20分ほどの時間がかかる計算になります。年度末処理の多い3学期の、貴重な放課後の時間をどのように捉えるかは様々あるでしょうが、この23時間20分がその後の高校3年間、大学4年間につながるものであると信じて行っています。

#### 4. スピーチコンテストについて

本校がスピーチコンテストを行うようになったのは、SELHi指定を受けてからです。最初は単学年での実施でしたが、2009年度は中学全体でのスピーチコンテストを行うことができました。

まず全体の流れとしては、2学期の段階で各学年でスピーチコンテストのテーマに基づいた予選を行います。予選は授業時間を用いて、全生徒を対象に中1は暗唱、中2・中3はスピーチを行います。これを生徒が相互評価し、決勝に進む生徒を決めます。項目は大きく3つあり、accuracy(文法・語彙の使い方の正確さ)、fluency(流暢さ)、contents(スピーチの内容、発音)をそれぞれ3点ずつ計9点で記入させます。クラス全体の集計がそのまま結果となりますが、これ以外に担当教

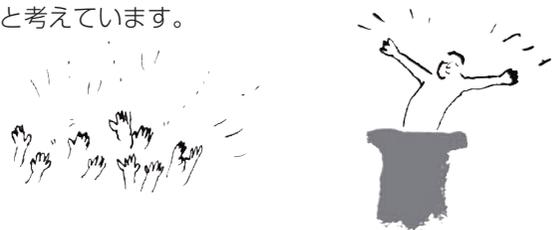
員からの推薦枠も設けてあります。

また、英語に対する高い意識を持ち、惜しくも予選で敗れた生徒達には司会をさせます。こうすることで、英語がとにかく好きで成績上位の生徒も、この生徒が活躍すれば全体の底上げにつながるという生徒も壇上にあげることができます。

事前のリハーサルでは、発表する順番を決めるためのくじ引き(draw for the order)の手順、マイク・ホールを使用してのスピーチの練習などの確認を行います。特にMCとなる生徒達にとっては、中学生徒全体を仕切る力と、それらを英語で行う力の両方が求められるので入念なりハーサルが必要となります。なるべくリハーサルを早めに一度やっておき、その後各自が練習する時間を持てるようにすることも大切なことであると考えます。

こうして迎えた当日は、各学年の発達段階を目の当たりにすることができる場となります。下級生は同級生の発表に刺激を受けるだけでなく、上級生の発表を聞くことで自分の1年後、2年後をイメージすることができます。また、上級生は同級生だけでなく、下級生にも見られているという気持ちから、これまで以上に準備をします。そして、そのモチベーションは決勝の舞台に上がった生徒だけでなく、その他の生徒に対しても「次は自分が」という気持ちを抱かせます。本校では、中学のスピーチの経験を高校の英語学習でも保証していくためのいくつかのカリキュラムがありますが、そのうちの1つである高1のスピーチコンテストでも中学の頃から活躍している生徒もいれば、全く想像していなかったような生徒が高校で活躍している姿も見られることからわかります。

英語は使うためにある、そのことを実感として気づかせるための取り組みを用意することと、その取り組みを一発限りの花火として終わらせないための日々の授業の在り方、生徒が英語を実際に使用する授業づくりを今後も検討し続けたいと考えています。



# From the Exotic to the Ordinary: Japan in American Films

by Bernard Susser

Bernard Susser teaches English in the Department of International Studies, Doshisha Women's College. He has taught at a Japanese junior and senior high school as well as at the college level in the US and Japan; his publications include research on teaching with games, the writing process, computers and language teaching, and cross-cultural communication.

Japan and Japanese culture have been taken up in many Hollywood films over the years; however, the way Japan has been represented has gone through some interesting changes. One extreme might be the recent *Memoirs of a Geisha* [*Sayuri*] (2005), a Hollywood film set in Japan with almost no reference to Westerners. The other extreme is represented by *Ronin* (1998), an action film set in Europe that has nothing to do with Japan, except for its title and a short scene in which a Frenchman explains the story of *Chūshingura*. Between these two extremes are films that are set in Japan for no particular reason; the story and the action might just as well have taken place in Hong Kong or Sydney or Paris. *House of Bamboo* (1955) is an early example; the title word “bamboo” gives a sense of the exotic although the film itself is a standard crime story. A more recent example is *The Fast and the Furious: Tokyo Drift* (2006), which is one of a series of films about car racing; there is no important reason in the story why the location has to be Japan.

Then there are many films that deal with cross-cultural communication and misunderstanding between Japanese and Americans. An early example is *The Barbarian and the Geisha* (1958), with John Wayne playing Townsend Harris, the first US official to reside in Japan. One feature of films like these is that part of the story involves teaching Americans about Japanese culture: In *The Yakuza* (1975), Takakura Ken explains the gangster's code to Robert Mitchum; 14 years later, in *Black Rain* (1989), Takakura Ken is explaining to Michael Douglas how the Japanese police operate. Explanations about Japanese culture are also a main theme of *The Karate Kid* (1984) and its sequels. In *Rising Sun* (1993), Japanese culture is again being explained to Americans but this time the sensei is Sean Connery! The most recent example of this type is *The Last Samurai* (2003), in which Tom Cruise plays an American soldier who takes part in a fictionalized Satsuma Rebellion; Watanabe Ken teaches him the values of the samurai.

My favorite films on the theme of cross-cultural (mis) communication are *Mr. Baseball* and *Gung Ho*. In *Mr. Baseball* (1992), Tom Selleck plays an American baseball



player who is traded to the Chunichi Dragons and must learn how to adjust to Japanese culture and Japanese baseball; the sensei is again Takakura Ken. In *Gung Ho* (1986), an American automobile plant is taken over by a Japanese company; this film draws its humor from the difficulties that both sides have in learning to adjust to each other's culture. The key point in both of these films is that both Americans and Japanese are stereotyped, which helps us see through the stereotypes.



Unfortunately, American films have not completely escaped from portraying Japan and Japanese in a stereotypical way. The comic portrayal of the Japanese photographer by Mickey Rooney in *Breakfast at Tiffany's* (1961), complete with thick glasses, yukata, and bonsai, is a cheap attempt at humor that borders on racism, and the Japanese company in *Robocop 3* (1993) is quite evil. Even a more recent film, Sofia Coppola's *Lost in Translation* (2003), has been accused of racism for its sarcastic descriptions of aspects of modern Japan. Not everyone agrees with this criticism; my own objection to this film is rather with its use of Japan as the "mysterious Orient," as in the scene where Scarlett Johansson walks across the stepping stones in the Heian Shrine garden just to create an "exotic" mood.

One other trend in Hollywood films is just the reverse of this kind of Orientalism: Japan is treated as ordinary, showing that Americans are not surprised or impressed by an encounter with Japanese culture, but accept it as a typical event in their own increasingly globalized culture. These films have nothing to do with Japan or Japanese culture in terms of their locations or stories; mentions of Japan are incidental, and therefore ordinary. A typical example is the introductory scene of *The Taking of Pelham One Two Three* (1974), in which Walter Matthau is giving a guided tour of the New York subway system to some Japanese officials when the action starts. In the same way, near the beginning of *Fatal Attraction* (1987), a man in kimono appears in a scene at a publisher's party in New York; he is the author of a book about an "ancient samurai exercise manual." Another example is the setting of *Die Hard* (1988) in the Los Angeles headquarters of a Japanese corporation; the executive offices have some Oriental-looking decorations and a miniature Japanese garden. When the hero of *Crocodile Dundee II* (1988) is in a New York City subway station, two elderly Japanese tourists ask him (in Japanese!) to take a souvenir picture of them. In *Hard To Kill* (1990), Steven Seagal recuperates in a house in California that has a tatami room (of course, Seagal lived in Japan before his Hollywood career). There is a scene in *The Bodyguard* (1992) in which Kevin Costner takes Whitney Houston to see Kurosawa's *Yojimbo* (English title: *The Bodyguard*). *Contact* (1997) is an SF film that has nothing to do with Japan but there is a scene in which Jodie Foster is in a room in Japan, wearing a kimono and staring at a hanging scroll.



Hopefully Western films that take up Japan and Japanese culture as a theme will continue to improve and avoid the mistakes and stereotypes that have characterized such films up to now. At the same time, I hope that American audiences will become even more used to the presence of Japanese cultural elements in every kind of film, as a confirmation of the internationalization of American culture.

Note: I would like to express thanks to my seminar students who over the years have discovered many of the scenes mentioned above.



# センター試験の 分析と対応

渡辺 聡

東京学芸大学附属高等学校

## I 2010年度筆記試験の分析と対応

### 1. 全体的な傾向

今年のセンター試験〔筆記〕でもコミュニケーション能力と読解力を試す出題がされた。出題形式や小問の配点で変更された部分もあるが、全体的な傾向は変わっていない。レベルとしては例年通り基本的な問題が多く、全体として設問内容が易化したため、平均点は昨年度より約3点高くなり、118.1点となった。

コミュニケーション能力をみる問題としては、  
第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力  
第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力  
第2問B：対話がスムーズに流れるよう、適切な発話を考える能力  
第3問A：難しい表現でも、全体の流れから意味を類推する能力  
第3問B：発言の内容を要約する能力  
が例年通り求められている。

また読解力では、  
第3問C：パラグラフ単位で文章の構成を論理的に思考する能力  
第4問：グラフ・表や説明文を参考にして文章を正確に読み取る能力  
第5問：2人の証言内容を読み、イラストや英文を正確に把握する能力  
第6問：エッセイの流れを正確に追い、話の趣旨をつかみながら長文を読み取る能力  
が試される。いずれも文章の全体的な流れをつかんだ上での確かな情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

### 2. 具体的内容分析

#### <第1問>

昨年度の小問A～DがA～Bの2題になり、配点も16から14に減った。小問AとBは昨年度と形式は変わらないが問いの数がAは3から4に、Bは2から3にそれぞれ増えた。

#### A 発音 (8点：解答数4)

基本的な単語の発音を問う問題。母音だけでなく子音や黙字にも注意を払いたい。カタカナになっている語の音 (wool〔問1〕、smooth〔問2〕) に惑わされないようにする。

#### B アクセント (6点：解答数3)

単語のアクセントのある箇所を問う問題。昨年度は全て3音節以上の語であったが、今年度は2、3、4音節の語が1つずつ出題された。音節をしっかりと区切り、カタカナになっている語のアクセント (damage〔問1〕、elevator〔問2〕) に惑わされないようにする。

#### <第2問>

形式と問題数は昨年度と変わらず。配点は小問Bが各3点 (昨年度は各4点) となり、全体では41点に減った (昨年度は44点)。

#### A 語彙、語法、文法 (20点：解答数10)

語彙、イディオム、動詞の用法、時制等を判断する問題。動詞の用法を問う問題 (to have been chosen〔問6〕、would have been～ing〔問5〕) は頻出である。語法やコロケーションの力を併せて要求する問題 (postpone～until〔問3〕、talk～out of〔問4〕、realize his dream〔問7〕) も相変わらず多い。基本的な動詞 (expire〔問2〕)、形容詞 (regular〔問8〕)、不可算名詞や同義語

等の幅広い知識も合わせ持っておきたい。

### B 対話文完成 (9点: 解答数3)

対話文を完成させる問題。発話数は昨年度と同様3~4である。状況をしっかりつかみ(OK class, [問3せりふ])、文脈の流れを捉え、会話特有の表現(just between you and me, [問2選択肢])に慣れておくことが大切である。

### C 語句整序 (12点: 解答数6)

各文の中に含まれる語彙・語法・熟語(what made you so upset with ~ [問1], the 800 yen I owe you for ~ [問2])を使い、意味の通る文を作る問題。使役([問1])、疑問詞([問3])といった文法・構文の知識も必要とされる。

#### <第3問>

形式は昨年度と変わらないが、配点は小問Aが各5点(昨年度は各4)に増えた。Aの本文の総語数は昨年度より減少し、1問は対話文となった。B、Cの総語数も減少した。

### A 語やフレーズの意味類推 (10点: 解答数2)

下線部の単語や表現の意味を全体から類推する問題。パラグラフや対話の中でどのように状況が推移しているのかを正確に読み取り、ヒントとなる語(句)をもとに想像力を働かせる。

### B 発言の意図の要約 (18点: 解答数3)

3人の発話の要旨を選ぶ問題。ある事柄を別の単語を使って言い換えている(doctors and nurses を medical professionalsで [空欄29], you should always show consideration を special attention should be paidで [空欄30])ので、幅広い語彙と、ポイントを押さえる柔軟な読解力が必要とされる。

### C 適文補充 (18点: 解答数3)

指定された空欄に選択肢で与えられた適切な文や文の一部を補う問題。

選択肢の文中、及び挿入箇所前後の代名詞や指示語、接続する語(句)に気をつけ、論が正しく展開するよう当てはめてゆく。[空欄32]では、その後の具体例をまとめる文、[空欄33]では、次のThe former, ~ The latter ~から2つの対照的な事象が述べられていることに気付くかがポイント。

#### <第4問>

形式は昨年度と変わらなかったが、小問Bの配

点が各5点(昨年度は各6)に減った。

### A グラフ読み取り問題 (18点: 解答数3)

本文とグラフを参考に、展開される論からの確かな情報を得る力を問う問題。本文で与えられた情報を順次グラフに当てはめ、設問では情報の内容を適切な表現で行う。本文中のtheir reasons for coming to Japan seem to be diversifyingが選択肢のa wider selection of attractions [問1]と対応していることを見抜く読解力も必要とされる。

### B 表読み取り問題 (15点: 解答数3)

フライト・スケジュールから適切な情報を読み取る問題。設問を読み、与えられた条件をもとに、合致する情報がどこにあるのかを探し出していく。

#### <第5問> (30点: 解答数5)

昨年度の3種類の出題から、1種類のみイラスト付き読解問題となった。解答数は昨年度の3から5に増え、配点も18から30と大幅に増えた。総語数は昨年度より減少した。

2人の証言をもとに図と状況を合わせ、それぞれの選択肢がどの時点で他と違うのか、一つひとつの事項を最後まで順を追って確認していく慎重さが要求される。

#### <第6問> (36点: 解答数6)

設問の配点は昨年度と変わらないが、設問数が6(昨年度は7)になり、配点は36点(昨年度は42)に減った。総語数は昨年度より約300減少した。

エッセイを読んで質問に答える問題。各パラグラフをトピック別に分類する問題(問6)や論全体の意図をまとめる問題(問5)は例年通り出されている。各パラグラフのポイントをつかみ、話がどのように展開し、話者が何を言おうとしているのか、という深い読み方ができる力を養っておきたい。また、正解の選択肢は本文に載っていない単語(表現)で求められる場合も多いので、基本的な類義語力も必要である。

## 3. 昨年度から変化のあった点

- ①総語数が2割弱減少した。
- ②マーク数が51となり、1増加した。
- ③第1問が小問A~Dの構成からA~Bに変わり、マーク数はA、Bともに各1問増となった。全体の配点は2点減少した。

- ④第2問小問Bの配点が各3と1点少なくなった。
- ⑤第3問小問Aの配点が各5と1点増えた。
- ⑥第4問小問Bの配点が各5と1点減った。
- ⑦第5問が小問A～Cの構成が1つになり、マーク数は2増えて5に、全体の配点は30と、12点の大幅増となった。
- ⑧第6問のマーク数が6と1減り、それに伴い、全体の配点は6減少した。

#### 4. 新傾向が見られる点

- ①第5問のイラスト付き読解問題はイラスト選択が1問になり、他は読解問題となった。

#### 5. 日頃の学習で大切なこと

##### ①多面的に語彙を増やす

ただ単に単語の1つの意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換など、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持たせると、未知の語に遭遇したときにも、想像力を働かせてなんとか意味がつかめるようになる。また、カタカナになっている語の英語と日本語の意味の差異や発音・アクセントに注意して覚えるのも1つの方法であろう。

##### ②語と語のつながり（語法、Collocation）に関心を持つ

ある単語を頭に入れる際、その語とつながりがある英語特有の表現も身につけたい。主語が何で

あるかによる動詞の用法の違い（someone realizes one's dreamとdreams come true〔第1問 問7〕）等、ある単語がどのような語と一緒に使われる場合が多いのかに気を配る習慣を身につけておきたい。

##### ③英語を聞き、自ら口にする

アクセント・強勢・構文（主語と述語の区切れや省略等）に注意を払って日頃から英語を聞き、音読をすることが大切である。音読をするためには、ただ音をなぞるだけではなく内容を理解する必要があるし、何回も繰り返かえて読み込んでゆけば、なによりも英語の音に対する興味・関心が必ずや増し、同時にリスニング試験の対策にもなり得る。

##### ④論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論の展開がどのようになっているかをパラグラフ中心に考える。パラグラフがどのように構成されているか、全体の論調を捉えてから各パラグラフのキーセンテンスを探す。「木を見て森を見ず」にならない大局的な読み方を心がけたい。

##### ⑤多読を心がける

80分で4,000語程度の分量の英語を読みこなすには、ふだんから500～1,000語の文章をある程度のスピードをもって読むことが大切である。授業では精読を中心に行っていても、たまには様々な分野の文章に触れるような機会を与え、分量をこなす読み方も覚えさせたい。

## Ⅱ 2010年度リスニング試験の分析と対応

### 1. 全体的な傾向

過去4年間ほぼ同じ出題形式である。解答数、配点、読まれる総語数(1000語強)はいずれも昨年度と同じである。読み上げ速度も昨年度とほぼ同じでナチュラルな感じである。問題音声も設問ごとに2回流された。今年度は比較的素直に英語の内容を問う基本的な問題が多く、平均点は昨年度よりやや上がり一昨年度とほぼ同じであった。(今年度29.39点、昨年度24.03点、一昨年度29.45点)。内容はいずれも生徒の日常生活や学校生活の中で起きうる身近な話題がテーマになっている。

### 2. 具体的内容分析

<第1問>対話ビジュアル(12点:解答数6)

- 2人の対話を聞き、イラスト、数字、語句を選択する

##### ●各対話の総語数:30語前後

イラストや図、数字を見ながら英語を聞く。最初の台詞で状況をだまかに把握し、求められる情報を的確に探し出す。対話に出てくる語(句)や数字が全て答えになるとは限らず、簡単な計算をする設問もある。キーワードは2番目～4番目のせりふに出てくるが、I want to grow a beard

〔問2〕のwant toを聞き逃さずに聞く注意力が求められたり、I'll go to an ATM.は選択肢のGet money.の意味と同じになる〔問3〕ことを見抜く能力も問われる。

<第2問>対話応答補充（14点：解答数7）

●対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する

●各対話の語数：20語前後

問8

Man : The coffee maker's broken.

Woman : Can we get it fixed?

Man : That would cost more than getting a new one.

選択肢：

- ① I didn't know new ones were so expensive.
- ② So why don't we have it repaired?
- ③ Thanks for asking, but I already had some.
- ④ Well, I guess we should buy one then. (正解)

相手の質問した（述べた）ことへの自然な反応を考える。本年度は応答の前の台詞はすべて平叙文であった。最初の2つのせりふから会話の場面や状況を想像したい。また、to have good days and bad days〔問13〕等、日常会話でよく使用されるフレーズにも慣れておきたい。

<第3問A>対話内容Q&A（6点：解答数3）

●対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する

●各対話の総語数：50語前後

問15

Woman : How do you think this brown coat looks on me?

Man : It's cute. You look like a teddy bear.

Woman : That's it. I'm not going to get this coat.

Man : Why not? I said you look cute.

Woman : You said I look like a teddy bear.

Man : What's wrong with that?

Woman : Never mind.

質問：Why won't the woman buy the coat?

選択肢：

- ① The coat isn't affordable.
- ② The coat isn't her size.
- ③ The man doesn't think the coat looks nice

on her.

④ The man thinks she looks like a stuffed animal. (正解)

5W1Hで始まる質問の答えを対話から探す。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんととらえる。事前に選択肢を読み、最初のせりふを聞いた段階で場面が想像できるようにしたい。せりふのa teddy bearが選択肢のa stuffed animal〔問15〕の、せりふのpoisonousが選択肢のdangerous〔問16〕の言い換えになっていることがわかるかがポイントとなる。

<第3問B>対話ビジュアル（6点：解答数3）

●対話を聞き、その内容からわかることを表の空所に埋める

●対話の総語数：約150語

聞き得た情報を順に図表に当てはめてゆく。選択肢の数字がそのまま読まれるので順に確定していけばよいが、by 9%, as did people in their late 50s to early 60s〔解答欄19〕のように、代動詞が指す内容を理解する力も問われている。また、情報は上から順に出てくるとは限らないので注意が必要。

<第4問A>

Short Passage 内容Q&A（6点：解答数3）

●Short Passageを聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

●各せりふの総語数：100語前後

問22

As a professional photographer I would like to give you some suggestions for successful landscape photography. In winter, for example, when the days are short, you need to know where you're going and what you want to photograph. You can get familiar with the area you're planning to visit by reading guidebooks and studying maps. Then, you'll know beforehand where the most attractive locations are, rather than leaving it to chance. At the location, you may need to get off the main path, so you should be careful. To take a good photo, it may be necessary to be in freezing conditions which might be dangerous.

質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねてゆき、求められる情報の所在を明らかにする。選択肢では答えとなる語が別の表現で表わされることがある (reading guidebooks and studying maps を doing background research に等) 場合も多い。

<第4問B> 説明文内容Q&A (6点: 解答数3)

●説明文を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

●説明文の語数: 約190語

質問文に目を通し、事前にどれだけの状況想定ができるかがポイント。あとは話の流れに沿って順に問題に当たってゆく。要求された情報を正確に取り出す力が要求されるが、ここでも選択肢では答えとなる語が別の表現で表わされている (the musicians leave the stage one by one ~ the two violinists who are left put down their instruments and walk away from the stage を No one is left on stage. に [問23]、They missed their families and the simple comforts of home. を The orchestra members were homesick. に [問25] 等)。メモを取りながら質問されるポイントの個所を絞って聞くことが大切である。また、1回目と2回目の読み上げの間に約40秒のポーズがあるので、情報が出揃った段階で各問の答えに目星をつけておき、2回目は確認の作業に当てたい。

### 3. 対応のポイント

①状況・場面を想像する力を育成する

事前に問題指示文、選択肢、イラスト等に目を通し内容を推測しておく。聞く前に精神的なプレッシャーをできるだけ少なくすることも正しい聞き取りへの第一歩である。

②会話特有の表現に慣れる

話の展開がつかめれば自然に聞くことができるが、up to [問5]、turn in [問14]、keep ~ in mind [問16]、free of [問21]、leave ~ to chance [問22] のようなフレーズは知っているだけではなく、聞き慣れておくようにもしておきたい。

③対話の流れや方向性をつかむ

最後の発言に対する相手の応答を考える場合 (第2問)、答えとなる情報はそのまま与えられて

いる訳ではない。それまでの話の流れを理解し、これからどのような展開になるのかを推測する能力が求められる。その際、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最後まで同じとは限らない。最後まで慎重に状況を確認したい。

④言い換えの表現を読み取る

リスニングと言っても選択肢を読み取る力は要求される。流れる英語の表現がそのまま選択肢に入っているとは限らず、ある表現を別の形で言い換えてある場合も多くある。正答のカギとなる情報をきちんと整理する能力も求められる。

⑤全部完璧に聞き取れなくてもよしとする

筆記試験で英文を一字一句完璧に理解する必要がないのはリスニングにおいても当てはまる。リスニングでは聞き取れなかった箇所を悩み込んでしまうと次を聞き逃すことになる。たとえ理解できなかった部分があってもそのまま流し、「後からさかのぼって推測すればいい」と思うくらいの余裕が欲しい。

## 4. 日頃の学習で大切なこと

①英語の音を聞くことを習慣にする

「継続は力なり」とよく言われるように1日5分間でも英語を聞き続けることが大切である。センター試験の英語はナチュラルスピードよりも若干遅く話され、独特のリエゾンもあまりない標準的なものである。様々なメディアを使って英語の音やリズムを継続的に耳に入れておくことを習慣としておき、英語を聞く抵抗感をできるだけ少なくしたい。

②聞いた音を真似して声に出す

リスニング力をつけるには、聞いた音を頭の中で論理的に組み立て直す作業が必要である。そのためには、耳に入ってきた音を実際に口にする shadowing や、英語での Qs & As、dictation 等の基本練習を日頃から行っておきたい。

③語彙を増やし、自分で表現する練習をする

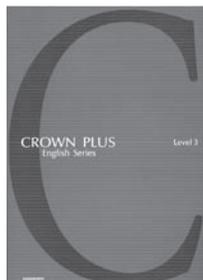
提供される情報の内容を理解するためには基本的な語彙が必要である。知らない単語は聞き取ることができないし、あやふやな理解では誤った情報を受け取ってしまう可能性がある。また、内容を整理して別の表現で言い換える練習も積んでおきたい。

# CROWN PLUS

## English Series

中高一貫教育にも対応した中高生向け英語テキスト

### CROWN PLUS **Level 3** 主対象 高1



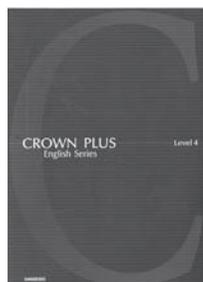
大学入試を見据えた初学年向けテキスト

高校英語で求められる論理的読解力の養成を目的としています。  
文法=高1～高3相当 英単語=3,000語レベル

B5判/2色刷・224頁 1,000円

[付属教材] WORKBOOK 650円/リスニングCD 1,500円  
[指導書] 3,780円 <指導用CDおよびCD-ROM付>

### CROWN PLUS **Level 4** 主対象 高2・高3



Level 3 の上位に位置付けられるテキスト

大学入試で求められる英語力の完成を目的としています。  
文法=高3以上 英単語=4,500語レベル

B5判/2色刷・184頁 1,000円

[付属教材] WORKBOOK 550円/リスニングCD 1,500円  
[指導書] 3,780円 <指導用CDおよびCD-ROM付>

**Level 1**

主対象 中1・中2 1,000円

発展的言語材料、多様な読解教材を収録した検定教科書補完テキスト。

**Level 2**

主対象 中3 1,000円

高校英語への橋渡しのための表現と読解のテキスト

\*表示価格は、学校納入価格(税込)。

#### 三省堂高校英語教育 2010年 夏号

- 発行 ————— 2010年6月20日 定価100円(本体95円)
- 編集・発行人 ——— 八幡統厚
- 発行所 ————— 株式会社三省堂 ●ホームページ <http://tb.sanseido.co.jp/english/>  
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14  
電話(03)3230-9421(編集) 振替 00160-5-54300
- イラスト ————— 只見優佳(ただみ ゆか)
- 表紙デザイン ——— 株式会社キャデック
- 印刷 ————— 三省堂印刷株式会社  
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9 電話(0426)45-6111(代)

# 学習機能を充実させた最強のツール 高校生用英語辞典 勢ぞろい!

## グランドセンチュリー 英和辞典 第3版 CD付き

木原研三 [監修] 宮井捷二・P.E.ダベンポート [編]  
B6変型判 1,960頁 3,129円

入試に強く、入門から使える中級～上級向け学習英和の最新版。昨秋の改訂で収録項目数を飛躍的に増強し、総項目数は6万8千に。2段階の入試頻度表示など、万全の大学入試対策。巻末には1万4千項目収録の和英付き。



グランドセンチュリー  
和英辞典 第2版〈CD付き〉  
3,129円



## エースクラウン英和辞典

ACE CROWN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

投野由紀夫 [編]

2,835円 1,888頁 B6変型判 2色刷

巻頭カラー  
96ページ!

中学の復習ができる  
「学習ページ」

コーパスを駆使!

最重要語を  
徹底解説する  
「フォーカスページ」

和英総項目  
2万3千!

類書中最大の  
「和英小辞典」付き



## 語法・受験に強い! WISDOM 現代英語に強い!

しかも、進化するウェブ辞書が無料で使える!

ウェブ版英和は全見出し語にネイティブの音声付き。また、英和・和英ともに、教材作成・英作文に便利な新ツール「用例コーパス」を装備(一般公開中)。詳しくは、<http://www.dual-d.net/>へ。

### ウィズダム英和辞典 第2版

井上永幸・赤野一郎 [編]  
[並装] 3,465円 [革装] 5,250円

### ウィズダム和英辞典

小西友七 [編修主幹]  
[並装] 3,465円 [革装] 5,460円



### 基礎からマスター [読む・聞く・話す]

単語力アップ  
のための工夫  
がいっぱい

持ち運びに便利な  
ハンディサイズ

小型版



ビーコン英和辞典  
第2版  
B6変型 2,835円



ビーコン英和辞典  
第2版 小型版  
A6変型判 2,310円

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411〈編集〉・9412〈営業〉  
<http://www.sanseido.co.jp/> \*表示価格は税込定価